

2021年8月23日発行



日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会

---

体育社会学専門領域  
発表抄録集  
第2号

2021年9月7日(火)～9日(木)

---

主管校：筑波大学，同時双方向オンライン開催



一般社団法人

**日本体育・スポーツ・健康学会**

Japan Society of Physical Education,  
Health and Sport Sciences

日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会  
体育社会学専門領域 発表抄録集 目次

◆口頭発表①：2021年9月9日(木) 9:00～09:50 会場4 (Zoom)

座長：大勝 志津穂 (愛知東邦大学)

[02 社-口-01] 9:00～

「運動部活動の効果研究」における性の二元化と多様性の  
不可視化に関する検討……………1

三上 純 (大阪大学大学院 人間科学研究科)

[02 社-口-02] 9:25～

保健体育科教員養成における女性の健康課題への視点……………<不掲載>  
：全国国公立大学のシラバスを対象に

前田 博子<sup>1</sup>、三浦 柚記<sup>2</sup> (1. 鹿屋体育大学、2. 株式会社 ZEN PLACE)

◆口頭発表②：2021年9月9日(木) 11:00～11:50 会場4 (Zoom)

座長：山田 理恵 (鹿屋体育大学)

[02 社-口-03] 11:00～

全国高等学校体育学科・コース連絡協議会及び全国高等学校長協会体育部会の  
歴史的変遷に関する研究……………5

日高 裕介 (早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科)

[02 社-口-04] 11:25～

中学生・高校生年代の競技大会の展開……………11  
：1946年から2001年まで

中澤 篤史、星野 映 (早稲田大学)

◆□頭発表③：2021年9月9日(木) 13:00～14:15 会場4 (Zoom)

座長：松尾 哲矢 (立教大学)

[02 社-□-05] 13:00～

野外教育における概念的「遊び」に関する一考察……………<不掲載>

蛭間 龍矢 (東京学芸大学大学院 教育学研究科)

[02 社-□-07] 13:50～

アスリートに向けられるインターネット上のネガティブなコメントの実態……………15

河野 洋 (福山平成大学)

◆□頭発表④：2021年9月9日(木) 14:25～15:15 会場4 (Zoom)

座長：久保 和之 (龍谷大学)

[02 社-□-08] 14:25～

海外柔道家の柔道参加動機と学習効果……………19  
：オランダ・ベルギーの柔道家を対象として

北村 尚浩、中村 勇、前阪 茂樹 (鹿屋体育大学)

[02 社-□-09] 14:50～

ボディビル競技における「のめり込み」を惹き起こす要因とその過程に関する  
実証的研究……………23

堀田 文郎<sup>1</sup>、松尾 哲矢<sup>2</sup> (1. 立教大学大学院 博士課程前期課程、2. 立教大学)

◆口頭発表⑤：2021年9月9日(木) 15:25～15:50 会場4 (Zoom)

座長：松田 恵示（東京学芸大学）

[02 社-口-10] 15:25～

<体育会系>就職最盛期に関する仮説生成的研究……………29  
：1990年代の大学新卒採用と企業スポーツの文脈に着目して

束原 文郎（京都先端科学大学）

# 「運動部活動の効果研究」における 性の二元化と多様性の不可視化に関する検討

三上純（大阪大学大学院・学生・博士後期課程／日本学術振興会）

## I 問題の所在

本研究は、運動部活動が生徒の身体や心、社会関係に及ぼす影響を明らかにすることによってその活動に様々な社会的意義を与えてきた実証研究をジェンダー／セクシュアリティの視点からレビューすることを通じて、これらの研究群の課題を明らかにするものである。

これまで、暴力や勝利至上主義といった運動部活動に付随する様々な問題(以下、「運動部活動問題」)に関する議論が繰り返行われてきた。神谷(2015)は、繰り返される「運動部活動問題」の歴史や実態から抜け出ることができないのは、運動部活動の教育的意義が「道德教育」や「体力づくり」、「競争」など他の教育活動で代替可能な言説で語られ、固有の意義が十分に議論されてこなかったためであると指摘している。そして、このような現状から抜け出すためには運動部活動のあり方を、これまでとは異なる言葉で語る必要がある」(p.263)という。

しかし、こうした言説的な意義が実証的に明らかにされてきた側面もある。今宿ほか(2019)は運動部活動が生徒の身体や心、社会関係に及ぼす影響を検討した実証研究(以下、「運動部活動の効果研究」)に関する論文のレビューを行い、対象とされてきた「効果」の内容を明らかにしている。そして、こうした実証研究の意義とは「様々な課題を解決する運動部活動の可能性を実証的に裏付けることにある」(p.12)と述べている。しかし、これらの研究で実証された「効果」には神谷(2015)が「言説」と呼ぶものが多く含まれている。つまり、これらの「効果」が科学的正当性を帯びることで、運動部活動をこれらの言説によって語る根拠を与えていると考えられる。そうだとすれば、「運動部活動の効果研究」を批判的に読み解きその課題を明らかにすることは、運動部活動を「これまでとは異なる言葉」で語り、「運動部活動問題」を解決するための一助となるのではないだろうか。

「運動部活動の効果研究」を批判的に検討するために、本研究ではジェンダーやセクシュアリティといった視点からレビューを行う。運動部活動の主たる内容である競技スポーツは、主に19世紀のイギリスにおいてエリート男性を中心として近代化されたものである。それは「男らしさ」を育成するための教育的手段として活用され、その制度全般が男性に有利に働くように設計されてきた。こうしたスポーツを行う運動部活動への参加が生徒に与える影響は、生徒の性別によって異なることが明らかにされてきた(羽田野, 2001 など)。近年では、スポーツにおける非シスジェンダーの経験や運動部活動の異性愛主義に着目した研究も行われている(井谷, 2021 など)。このような研究成果に目を向ければ、運動部活動を検討する上でジェンダーやセクシュアリティという視点は不可欠であると考えられる。

しかし、運動部活動研究の動向についてまとめた論文(中澤, 2014; 河村, 2017)においてはジェンダーやセクシュアリティに関する研究にはほとんど触れられていない。また、今宿ほか(2019)においても「運動部活動の効果研究」において「性」という変数がどのように用いられているのかについては触れられていない。このような状況を踏まえて、本稿では「運動部活動の効果研究」において「性」がどのように扱われてきたのかを批判的に検討する。

## II 研究方法

対象論文の収集方法は今宿ほか(2019)に依拠し、①実証研究である、②何らかの従属変数を設定し、運動部活動所属者と対照群を比較した研究である、③国内の中学校・高等学校の生徒を調査対象とした研究(ただし、中学校・高等学校の運動部活動所属経験を考慮した分析を行なっている場合は、大学生や成人を調査対象とした研究も含む)である、という基準に合致するものを選定した。

さらに、それらの論文の参考文献のなかで上記の基準を満たす論文を分析対象に追加した。

本研究では、イギリスの教育社会学に関する学術論文、報告書、選集、教科書などをフェミニストの視点からレビューしたアッカー(1998)の方法を参考とした。3つの主要な社会学の学術雑誌(British Journal of Sociology, Sociological Review, Sociology)に掲載された教育に関する論文184本を対象にレビューを行なったアッカー(1998)は、「見えない女性 invisible women」と「見える女性 visible women」という視点から、いかに女性が不可視化／可視化されているのかを明らかにしている。

また、「運動部活動の効果研究」における「性」の扱われ方を検討するにあたり、第二波フェミニズムの興隆以降に生み出されたジェンダー概念の変遷を確認し、性が社会構築されるものであるという立場からレビューを行なった。加えて、性を構成する要素の複数性と、性の流動性・連続性を意味する「性の多様性」という視点からレビューを行うことで、当該研究の中で「性の多様性」がいかに不可視化されているのかを検討した。

### III 結果及び考察

#### 1. 対象者の性別

各論文における対象者の性別を確認したところ、性別が不明な論文(以下、「不明」)が12本(7.8%)、女性のみを対象とした論文(以下、「女性のみ」)が12本(7.8%)、男性のみを対象とした論文(以下、「男性のみ」)が25本(16.2%)、女性・男性を対象とした論文(以下、「両性」)が97本(63.0%)であった。また、性別の選択肢として「どちらでもない」を設定しているものや、無記入・無回答を分析に含めている論文(以下、「両性+他」)が8本(5.2%)であった。

#### 2. 見えない女性

「男性のみ」に該当する25本の論文のうち、女性が含まれていない理由を明示しているものは2本だった。いずれも被験者には女性が含まれているが、対象人数が少ないという理由で分析や考察からは除外されており、アッカー(1998)が「変数の統制」と呼ぶものに該当する。

残り23本のうち、女性を含まない集団を調査対象とすることで、カテゴリー上女性を排除しているものが5本あった。そのうち4本は男子校を対象としたもの、1本はサッカーのJリーグ・ジュニアユースクラブを対象としたものである。また、「不明」の中にも2本、サッカーのJユースクラブを対象としている論文が確認されたが、いずれも記述内容から想定される対象者の性別は男性であり、女性は対象に含まれていないか、含まれていてもごく少数であると推測される。

「男性のみ」においては、性別に関わらない一般的な問題設定がなされた上で、男性のみが対象とされていた。またその多くは「運動部員」や「運動選手」、比較対象としての「一般生徒」や「非運動部員」といった「非性的なカテゴリー」によって「結果」や「まとめ」の記述がなされており、男性のみを対象とすることによる限界にはほとんど触れられていない。こうした論文構成は、男性のみから得られた知見が一般的に汎用可能であると認識される危険性をはらんでいる。

#### 3. 見える女性

まず、「女性のみ」の問題設定に着目すると、「男性のみ」とはまったく異なる傾向が見られた。それは女性を対象とする理由が明記されている点にあり、その記述は2パターン見られた。1つ目はすでに男性について検討した内容について、それとは異なる存在として女性を二次的な検討対象とするもので、1980年代までの3本の論文が該当する。2つ目は1990年代以降に見られる「女性としての女性」に焦点を当てた論文であり、過度なスポーツ実施による月経周期異常や、骨密度や骨量などに関するものである。男性のみを対象とする研究はその理由を示すことが暗黙のうちに免除されるが、女性のみを対象とする場合には理由を示さねばならないという不均衡がある。

「両性」と「両性+他」における性の扱われ方を検討する上で重要となるのは「性差」がどのように捉えられているのかを明らかにすることであるが、対象論文においては根拠や理由を示すことなく男女をひとまとめにして分析する論文(以下、「性差の無視」)が見られた。しかし、運動部活

動を検討対象とする上でジェンダー視点は不可欠である。「性差の無視」には、運動部活動への参加による影響が、生徒の性別によって異なることを見落としているという問題がある。

「両性」と「両性+他」における分析手法に着目すると、「性差の無視」とは異なり、男女が根本的に異なる存在であることを前提としている論文（以下、「性差の前提」）が確認された。「性差の前提」には男女をまったく別々に分析する論文（以下、「男女別分析」）と、男女を比較して分析する論文（以下、「男女比較分析」）が含まれている。「男女別分析」においては、男女を分けて分析する理由が示されることはない。また、2000年代以降の「男女別分析」に該当する論文のほとんどは体力や体格、骨密度などの身体を検討対象に含んでいた。これは身体以外を対象とする場合も「男女別分析」が多く見られた1950-70年代とは異なる傾向である。つまり、男女をまったく異なる存在として扱うことは少なくなってきたが、身体の男女二分法は根強いと考えられる。

次に、「男女比較分析」についての具体的な記述例として、竹村ほか(2007)は「学業の目標志向性および適応（無気力感・授業満足感）に関して、部活群と非部活群との間で差が見られるかどうかを検討するため、...(中略)部活の有無（部活群／非部活群）と性（男子／女子）を独立変数とする二元配置分散分析（p.5）を行なうとしているが、性が分析に組み込まれる理由は不明である。このような分析方法はほかの論文でも散見され、主要な関心事に加えて性別は分析に組み込むことになっている状況がうかがえる。

分析から見出された性差の解釈に関する記述に着目すると、見出された性差について考察を行わないもの（以下、「性差の放置」）と、見出された性差を性別特性として解釈するもの（以下、「性別特性論的解釈」）が確認された。「性差の放置」は、分析から見出された性差を考察しなかったり、分析結果の記述にとどまることで、「男女には差がある」という事実だけを生み出している。

「性別特性論的解釈」の例として青木(2004)は、「不安・不眠」と「社会的活動障害」という観測変数において女性が男性よりも得点が高い（精神的健康状態が悪い）ことを示したと報告し、「有意な性差については、女性特有（依存性や融合同調性）やこの時期に早熟を迎える女子の内向的傾向による感情の大きな振幅（感受性の増大）、あるいは症状認知の違い等に起因すると考えられよう」(p.396)と述べている。このように、性差は性別特性として解釈されている。「性別特性論的解釈」は、体力や運動能力といった身体に着目した研究においても多くみられた。

分析から見出された性差を放置せず、なおかつ「性別特性論的解釈」に陥らない形で、ジェンダー視点から考察している論文（以下、「ジェンダー視点」）も見られた。「ジェンダー視点」では、性差は運動部所属率や運動経験といった経験の差によって考察されていた。また、自尊感情の性差を指摘した論文(松岡・押澤, 2001)においては、男女間に存在する権力関係にもとづいて考察が行われていた。しかし、運動部活動への参加による影響が生徒の性のあり方によって異なることを考慮に入れた記述を行なっている論文は確認できなかった。

#### 4. 性の多様性の不可視化

まず、「女性のみ」、「男性のみ」の場合、対象者の性別については研究方法の段で「女性／男性を対象とした」と説明されていた。つまり、性別は調査項目に含まれておらず、おそらく被調査者は自身の性について伝える場が設定されないままに調査に参加しているものと思われる。また、「両性」の場合、「方法」もしくは「結果」に関する記述のなかで対象者の性別が示されることが多いが、たいいては女性・男性の実数や割合が示されている。このことは、調査において選択可能な性別が「女」、「男」のみであったことを示唆している。そうだとすると、自身の性について回答する基準（戸籍上の性別で回答するのか、自認する性別で回答するのか、など）は被調査者に委ねられると考えられるが、いかなる基準で回答しても、それは調査者の想定する「女」、「男」の枠組みに回収されてしまう。これらは性の多様性が調査設計によって不可視化されているものである。

だが、すべての回答が「女」、「男」の枠組みに回収されるということだけが問題なのではない。なぜならこのような調査設計は、「女」、「男」のどちらかを選ぶことができるという前提に基づいているからだ。「両性」または「両性+他」のなかで、有効回答の判断基準として示されていたのは、

欠損値がないこと、もしくはすべての項目に回答していることであった。これは二択で示された性別に回答しない／できない人は分析に含まれていないことを意味する。しかし、これは選択しない／できない回答者の問題ではなく、調査設計上の不備といえるだろう。何をもって「女」を、あるいは「男」を選択すればよいのかを明記したり、選択の幅を広げたり、性を多面的に捉えるための項目設定によって、対象者の実情に応じたデータ収集が必要である。

本研究では「両性+他」が9本確認された。しかし、9本のうち5本は「女」と「男」からなる性別を独立変数として設定した分析を行っており、4本は「性差の無視」に該当する。前者では、性別を変数として設定した時点で「無記入」や「どちらでもない」という回答をした人は分析から除外されてしまう。後者では、性別による経験の差を考慮していないため、「無記入」や「どちらでもない」という人の経験は全体の中に埋もれて不可視化されてしまう。このような形で、「運動部活動の効果研究」においては性の多様性が不可視化されている。

#### IV 結論

本稿では、「運動部活動の効果研究」における性の扱われ方について検討した。その結果、「女性のみ」と「男性のみ」の間にある不均衡や性差を前提とする分析方法、分析の結果見出された性差を放置したり、性別特性論的に解釈をする論文が確認された。また、調査設計や分析方法の問題により性の多様性が不可視化されていることが明らかとなった。

本研究は、繰り返される「運動部活動問題」を解決していくためには「これまでとは異なる言葉」で運動部活動を語る必要があるという神谷(2015)の指摘に動機づけられている。本稿では、運動部活動に社会的意義を付与してきた「運動部活動の効果研究」において、それが誰にとっての効果であるのかという視点が不足していることをジェンダー／セクシュアリティの視点から指摘した。特に2000年以降は、日本でもスポーツとジェンダー研究が興隆しており、体育・スポーツ関連の学会においてもジェンダー視点の重要性は認識されつつある。こうした動向が運動部活動研究においても反映されることが望まれる。

#### 文献

- アッカー：河上婦志子(1998)女性のいない世界。神奈川大学心理・教育研究論集，(17): 95-113
- 青木邦男(2004)高校運動部員の精神的健康変化に関連する要因。学校保健研究，46: 358-371.
- 羽田野慶子(2001)中学生の運動・スポーツ参加とジェンダー意識。東京大学大学院教育学研究科紀要 40: 79-88.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規(2019)学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題。体育学研究，64(1): 1-20.
- 井谷聡子(2021)〈体育会系女子〉のポリティクス：身体・ジェンダー・セクシュアリティ。関西大学出版部：大阪。
- 神谷拓(2015)運動部活動の教育学入門。大修館書店：東京。
- 河村明和(2017)日本の学校教育の変遷から見た部活動の現状と今後の在り方についての検討。早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊，24(2): 43-53.
- 松岡英子・押澤由記(2001)中学生の自尊感情を規定する要因。信州大学教育学部紀要，(104): 133-143.
- 中澤篤史(2014)運動部活動の戦後と現在。青弓社：東京。
- 竹村明子・前原武子・小林稔(2007)高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係。教育心理学研究，55: 1-10.

#### 付記

本報告は、科学研究費補助金特別研究員奨励費 21J12683(研究代表者:三上純)の成果の一部である。

# 全国高等学校体育学科・コース連絡協議会及び 全国高等学校長協会体育部会の歴史的変遷に関する研究

日高裕介（早稲田大学大学院 学生・博士後期課程）

## 1. はじめに

本発表は、学校組織に依存してきた日本の青少年スポーツを理解するために、体育学科・コースを中心に検討していく試みの一作業の成果である。

日本において戦前から学校教育に依存し発展してきた青少年スポーツは、教科体育や運動部活動が中心となって論じられてきた。それゆえ、教育課程内に位置づく教科体育によって、多くの児童・生徒がスポーツに親しむことができ、教育課程外に位置づく運動部活動によって、より専門的にスポーツに取り組み、日本スポーツの競技力向上の側面も担ったきたといえる。こうした日本スポーツの大衆化と高度化は、学校という教育組織に依存してきたからこそ展開してきたといえるだろう。

このとき、本発表で注目する高等学校の体育に関する学科・コース（体育学科・コース）は、なぜ戦後高校教育の中で全国的に設置されてきたのか<sup>1)</sup>。学校組織におけるスポーツ活動の場として、教科体育や運動部活動だけでは不十分な点があったということの意味しているのだろうか。また、十分に検討できているわけではないが、日本のように高校教育にスポーツを専門的に学ぶ場として体育学科・コースを設置している国は、管見の限り見受けられない。この体育学科・コースという不可思議な制度に焦点を当てることで、高校教育における体育・スポーツの果たしてきた機能や制度的な位置づけを理解することに繋がるのではないかと、というのが発表者の問題関心である。

対象となる体育学科・コースは、2018年度において257校の高校に設置されている。公立・私立、学科・コースからなる4象限で分類すると、私立高校体育コースが127校に設置されており全体の約50%を占めているというのが特徴である。また、この257校に設置される体育学科・コースは、全国的に拡大しており、各都道府県に1校以上の体育学科・コースが設置されてきた。つまり、都市部や地方など関係なく、幅広く高校教育にとって体育学科・コースが必要とされてきたことがわかる。

体育学科・コースの設置数を見てみると、1980年代・1990年代に1つ特徴が見て取れる（図1）。この時期には、普通科の設置数の緩やかな増加に対して、体育学科・コースはその数を7倍近く増やしている。他方で、農業や工業、商業などのいわゆる職業学科が減少傾向にあるのに対して、体育学科・コースはその数を増やしている<sup>2)</sup>。このように、体育学科・コースは、普通科と職業学科と距離がある中で展開してきたことがわかる。それでは、体育学科・コースがどのような歴史的展開の中で、全国的に拡大してきたのだろうか。

しかしながら、そもそも体育学科・コースについては、体育・スポーツの学会や、その他各種体育・スポーツ専門誌においてもほとんど取り上げられるこなかった。そこで、まずは体育学科・コースに関連した数少ない調査報告を見ていく（飯田，1999）。飯田（1999）は、文部省からの委託を受けて1998年度に実施した調査報告をもとにして、「特色ある学校づくり」を基本方針とする高校教育改革が進展する中で、どのような学科・コースが増加してきたのかについて調査している。その中で、体育学科・コースの設置については、教育課程の大綱化・弾力化を打ち出した1978年学習指導要領の改訂を契機に、1980年代前半に増加し始めたことを指摘している。また、飯田は体育学科・コースが、運動部員の競技力向上を主要目的として設置されているとの見解と共に、体育学科・コースの生徒の中には、不満を抱き、進路への不安を抱えていることを指摘する。総じて、

体育学科・コースは、他の特色ある学科・コースと比べて改善すべき課題が多いと評価されていることが窺える。

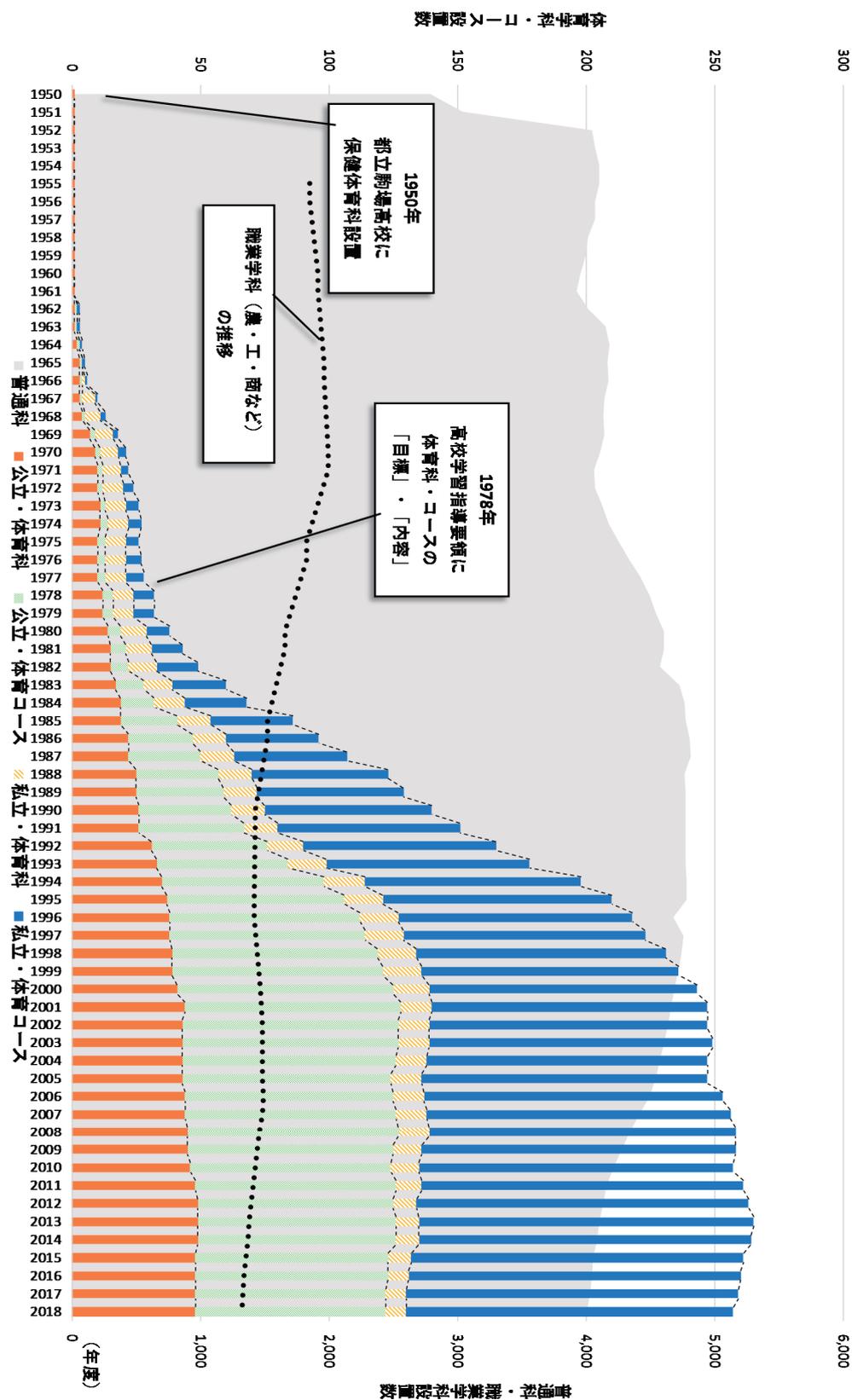


図1 高校における体育学科・コースの設置数の推移

学校基本調査や『スポーツと健康』、全国高等学校長協会・全国高等学校体育学科・コース連絡協議会の総会・研究大会の冊子、各高校の web サイトをもとに筆者が作図<sup>3)</sup>

この飯田ほか（1999）の調査を踏まえて、荒井らの研究グループは、15校（学科9校・コース6校）の体育学科・コースのみに限定されていることを指摘し、体育学科・コースの実態解明を試みている（荒井ほか，2001；服部ほか，2002a，2002b；迫ほか，2001）。これらの研究の問題関心は、体育学科・コースが運動部活動の競技力向上との関連があることを前提として、体育学科・コースの生徒の運動部活動に対する意識（満足度・不安など）を調査することにある。学科・コースや公立・私立での差異、競技レベルと満足度の関係、教員と生徒間での満足度と悩みのズレなどを分析しているものの、結果として体育学科・コースの生徒ならではの特徴を示すに至っていないといえる。

これらの研究は、体育学科・コースが1980年代に増加してきたことや、運動部活動と関連を指摘している点で、先駆的な研究であると評価できるものの、いずれも資料的にも内容的にも体育学科・コースの歴史の全体に迫るには不十分である。特に、運動部活動との関連でいえば、現在257校に設置される体育学科・コースにおいて「強化指定部」を設けている高校は、約6割であった。そのため、体育学科・コースと運動部活動（特に強豪校運動部）との関連を実証的に解明していく必要があるだろう。一方で、特に公立高校における体育学科・コースでは、各都道府県教育委員会の意向が加味されるため、運動部活動との関連する文脈のみでその設置を説明できるわけではないと考えられる。

ただし、国民体育大会（国体）の歴史を解明した権（2006）は、国体の学校教育への悪影響の1つに高校の「競技力向上指定校」「強化指定校」による選手強化策をあげている。権の研究では、学校名が伏せられていることもあり、体育学科・コースとの関連が述べられているわけではないものの、都道府県体育協会と都道府県教育委員会がともに強化策を推進してきた過程が事例をもとに述べられている。この強化策の準備が10年前から実施されてきたという指摘も踏まえると、公立高校における体育学科・コースの設置と国体の関係が窺える。

こうした研究動向を踏まえると、各都道府県における学校の展開の仕方との関連や、特色ある学校の実現という点において、体育学科・コースの設置は各都道府県・学校の方針との関連があると考えられる。そのため、体育学科・コースの歴史的展開を把握することは困難であるといえる。そこで、本発表では、体育学科・コースの展開過程とその背景を理解するために、全国高等学校体育学科・コース連絡協議会（体育学科連絡協議会）及び、全国高等学校長協会体育部会（全高長会体育部会）に着目する。

体育学科連絡協議会は1967年に組織され、全高長体育部会は1976年に全国高校長協会第29回総会において、規約第5条に基づいて部会として発足が承認されることとなった。両組織は、「高等学校体育学科・コース等の育成発展と保健体育教育の振興を図ること」を目的としており、この目的を達成するための主な事業が、「総会・研究大会」の開催である。そこでは、体育学科・コースにおける体育授業の模擬授業や、改訂される学習指導要領にどのように対応していくのかなど時代に求められる在り方について議論されている。両組織の会長は都立駒場高校の学校長が担い副会長も両組織同一人物が担っている。事業内容としては、ほとんど同じであるものの2つの組織が統合しない理由は会員にあると考えられる。全高長体育部会の規約によれば、「体育学科・コース等を設置する高等学校の校長」と「過去に正会員であり、理事会で推薦した者」だけであるという。一方で、体育学科連絡協議会の規約によれば、「体育学科・コース等設置校の保健体育科教諭および第2条の目的に賛同する者」となっている。そのため、連絡協議会の会員であることによって、総会・研究大会に参加できるということになる。

こうした体育学科連絡協議会・全高長体育部会に着目することで、すべての体育学科・コースの展開について網羅できるわけではないものの、その全体像を見ていくことの基礎作業となると考えられる。特色ある学科・コースとして、体育・スポーツが選択されるようになる中で、どのような成果があり、どのようなことが課題とされていたのか。こうしたことを理解するためにも、本発表では、体育学科連絡協議会・全高長体育部会がどのような性格を持った組織なのか、それはどのよ

うなことを成果とし課題としてきたのかを明らかにする。この基礎的作業を通して、全体的な体育学科・コースの歴史を理解したい。

## 2. 研究方法

### 2-1. 分析の視点

本発表では、体育学科連絡協議会・全高長体育部会の歴史を描くための基礎作業として、試行的に、3つの視点から検討する。1つ目は、加盟校の推移である。体育学科連絡協議会・全高長体育部会への加盟校数は、資料を網羅的に用いて作成した図1の設置数では差異がある。こうした差異から、体育学科連絡協議会・全高長体育部会にはどのような高校が加盟し、一方で退会したのか。このような視点から、加盟学校の数と割合の推移を明らかにしていく。

2つ目は、体育学科連絡協議会・全高長体育部会が、独自に開催する全国的なスポーツ大会の推移である。この大会では、1992年から女子バレーボール、1993年から女子バスケットボールと男女の柔道、2014年から男子バレーボール、2018年から男子バスケットボールの種目が実施されている。北海道から九州までの体育学科・コースの高校が幅広く参加しており、全国大会と呼べる大会となっている。では、どれくらいの学校が参加してきたのか、それらの数はどのように変遷してきたのか。このような視点から、スポーツ大会の推移を明らかにしていく。

3つ目は、財政規模の推移である。全国的なスポーツ大会の開催や、総会・研究大会の開催などの事業を展開しようとする際に、どのような財政基盤を整えてきたのか。どれくらいの財政規模で運営されているのか。このような視点から、収支および支出の推移を明らかにしていく。

以上のような視点から体育学科連絡協議会・全高長体育部会の全体像を掴んだ上で、体育学科・コースの存続に対してどのような成果や課題を捉えていたのかを分析する。特に、1978年(第13・3回)から1999年まで、総会・研究大会の会場校が加盟校へのアンケート調査を実施し、体育学科・コースの生徒の志望理由と進学先の実態を示している。1978年以降という時期は、体育学科・コースが急増する時期であるため、この時期の体育学科・コースの成果と課題について理解することができるといえるだろう。

### 2-2. 扱う資料

以上の視点から分析を行うため、関連する資料を体育学科連絡協議会・全高長体育部会の事務局である都立駒場高校などにおいて、2019年7月から収集してきた。主に収集した資料は、体育学科連絡協議会・全高長体育部会が毎年開催する総会・研究大会の冊子である(図3)。第1回1967年から2020年までの資料収集に努めているが、抄録提出時にはすべての資料を収集できていない<sup>4)</sup>。この冊子には、両会の収支決算書や体育学科・コースのスポーツ大会の報告、毎年決められたテーマに基づいて実施される研究協議の概要、加盟校一覧などが記されている。また、その他にも全国高等学校長協会も刊行に関わっている『月刊高校教育』などの関連資料も収集した。

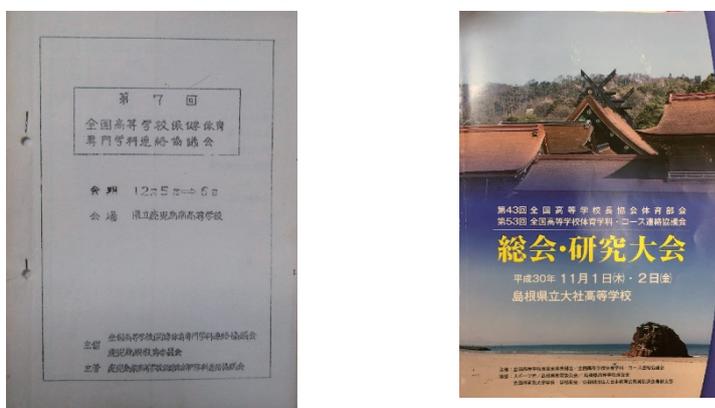


図2 一部の体育学科連絡協議会・全高長体育部会の冊子  
(左：第7回大会(1972年)、右：第53・43回大会(2018年))

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 加盟校の推移

体育学科・コースを設置する高校がどれくらい体育学科連絡協議会・全高長体育部会に加盟したのか、その全体に占める割合はどれくらいだったのか、それらの数や割合はどのように変遷してきたのかについて分析する。

結果は、図3に示した。加盟校の推移としては、先の図1の傾向と類似しているといえる。1980年以降に急激に増加し始め、2000年以降にはその増加は落ち着き、加盟校の場合は減少傾向を示している。2000年にピークの159校の加盟がなされているものの、図1では2000年に243の体育学科・コースを設置していることがわかる。なぜすべての体育学科・コースが加盟していないのだろうか。その原因の1つに私立高校体育コースの数が少ないことがあげられる。先述したように、私立高校体育コースは2018年度において体育学科・コース全体の約50%を占める割合で設置されているが、加盟校の推移ではその傾向が窺えず、むしろ公立高校体育学科・コースが約40%を占めている。

このことから、体育学科連絡協議会・全高長体育部会には、公立高校の加盟校が多く、私立高校の加盟校が少ないことがわかる。また、2018年に近づくほど、私立高校の加盟校数は減少している。ここには、学科とコースの制度的な違い、設置者の違いが関係しているのではないかと推測する。この点については、発表当日に報告することとする。

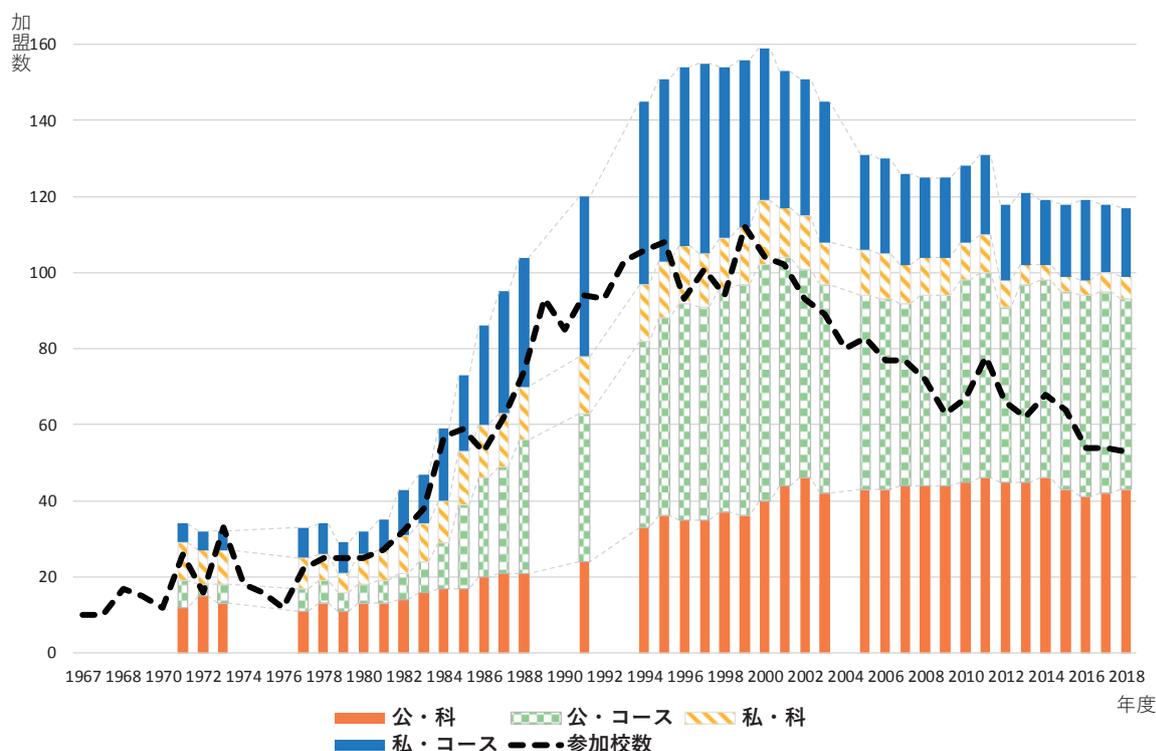


図3 加盟校と総会・研究大会参加校の推移

#### 4. 小括

本発表では、体育学科連絡協議会・全高長体育部会の歴史の基礎的検討を行った。その分析から得られた結果を小括しておく。体育学科連絡協議会は、1967年に体育学科・コースを設置する高校によって設立され、1976年には全国高校長協会の1つの部会として全高長体育部会が発足した。その後、1980年以降には加盟校の数が増えていくものの、実際に存在する体育学科・コース数よりも半数近く少ない加盟数であった。その理由の1つに、私立高校体育コースの加盟の少なさがあげられる。2018年には約50%を占める私立高校体育コースが加盟せず、また体育コースを廃止したわけではないものの、退会していくことになった背景には、公立・私立、学科・コースによる制度的

な違いがあるといえるだろう。紙面の都合上、「3-2 スポーツ大会の推移」、「3-3 財政規模の推移」については、発表当日に詳細に報告する。

こうした体育学科連絡協議会・全高長体育部会の歴史的展開を概括的に捉えた上で、体育学科・コースの果たしてきた成果と、抱えてきた課題について分析することによって、公立・私立、学科・コースからなる4象限それぞれの特徴などが見えてくると考えられる。その点については、発表当日に議論していきたい。

#### 注

- 1) 本研究で対象とする体育学科・コースは、①普通科などと併科して体育科を設置している高校、②普通科などと併科して設置している体育科に体育コースがある高校、③普通科の中に体育コースがある高校、④体育系列の科目群がある総合学科の高校とする。これらは、体育学科連絡協議会・高校長会体育部会の資料に掲載されている加盟校一覧から導いた基準である。
- 2) 高校設置基準では、農業、工業、商業などの職業学科も体育学科も同じように「専門学科」として位置づけられている。しかし、文部科学省の統計データでは、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉が職業学科とされており、体育学科や音楽学科などはその他専門学科として位置づけられていることから、図1にも区別した形で示した。
- 3) 推移図の作成手順については当日発表させていただく。また、推移図は、日高(2021)の図から改良を加えている。
- 4) 抄録提出の際には、1967年度～1970年度、1974年度、1989年・90年度、1992・93年度、2004年度の冊子の収集が済んでいないため、抄録上の分析は虫食いになっている。発表当日は、すべての資料を収集した上で、詳細に発表することとする。

#### 7. 引用参考文献

- 荒井貞光ほか(2001) 高等学校体育学科・コースに関する調査研究(1). 第52回日本体育学科体育社会専門分科会発表論文集: 67-73.
- 服部宏治ほか(2002a) 高等学校体育学科・コースに関する調査研究(3). 第53回日本体育学科体育社会専門分科会発表論文集: 176-181.
- 服部宏治ほか(2002b) 高等学校体育学科・コース活性化に関する調査研究. 広島スポーツ科学研究, 12: 21-28.
- 飯田浩之(1999) 特色ある学科・コースの調査分析. 文部省「高等学校教育多様化実践研究委嘱」報告書.
- 権学俊(2006) 国民体育大会の研究: ナショナルリズムとスポーツ・イベント. 青木書店.
- 迫俊道ほか(2001) 高等学校体育学科・コースに関する調査研究(2). 第52回日本体育学科体育社会専門分科会発表論文集: 75-80.

# 中学生・高校生年代の競技大会の展開

—1946年から2001年まで—

中澤篤史（早稲田大学）・星野映（早稲田大学）

## 1. 本発表の目的と問題関心

本発表の目的は、1946年から2001年までの中学生・高校生年代の競技大会の展開を計量的に明らかにすることである。

中学生・高校生年代の運動部活動を中心としたユーススポーツは、日本のスポーツ文化を支える土台である。しかし今日、活動時間・日数の増大や勝利至上主義の弊害といった過剰なあり方が社会問題となっている（中澤、2017；内田、2017；島沢、2017）。運動部活動は、なぜ「やり過ぎ」になってしまうのか。

その背景には、運動部活動やユーススポーツの重要なイベントである競技大会が関係していると考えられる。周知の通り、中学校の「全中」（日本中学校体育連盟主催「全国中学校体育大会」）、高校の「甲子園野球」（日本高等学校野球連盟主催「全国高等学校野球選手権大会」および「選抜高等学校野球大会」）や「インターハイ」（全国高等学校体育連盟主催「全国高等学校総合体育大会」）など、さまざまな競技大会が活発に行われている。

毎年、それぞれの地域で勝者を選抜して日本一を決める競技大会システムは、ほぼすべての運動部活動を組み込んでいる。大会が用意されると当然ながら現場はそれに向けて準備するし、勝つために休まず活動せざるを得なかったり、怪我や事故のリスクを省みず止まらないこともある。「やり過ぎ」に至るほど運動部活動が過剰に駆り立てられてしまう理由の一つは、この競技大会システムにあると言える。であれば、これら競技大会の展開を分析することで、運動部活動の過熱化の歴史的背景を理解できるのではないか。

そうした問題関心から発表者たちは、運動部活動の競技大会の開催状況に注目し分析を進めている（中澤・鈴木、2020；中澤・星野、2021a、2021b）。本発表はこれらを引き継いで、1946年から2001年までの中学生・高校生年代の競技大会の展開を検討したい。ここで「中学生・高校生年代」と言うのは、中学校・高校の運動部活動だけではなく、同年代の学校外のスポーツクラブが参加する競技大会も含めるためである。

## 2. 先行研究の検討

本発表の対象とする1946年から2001年までの時代に、スポーツは、戦後復興の歩みとともに再開されて、そのあり方が1964年オリンピック東京大会によって強く影響を受けた。その後、スポーツの大衆化と高度化が、従来の学校依存体制からの脱却が目指されつつ進んでいった（内海、1993；関、1997；石坂・松林、2018；坂上、2018）。

とくに転機になったのが、1964年のオリンピックだった。1961年のスポーツ振興法の成立によって、勝利至上主義的な「オリンピック体制」が確立された（関、1997、p.141-170）。競技大会についても、終戦直後の1946年から開始された国民体育大会が、東京オリンピックに向けてナショナリズムを強化する形で1960年代に活性化していった（権、2006）。

しかし、東京オリンピック以降は勝利至上主義的なあり方が反省され、スポーツの大衆化が求められた。たとえば、日本体育協会は「国民総スポーツ」と「競技力の向上」を二大目標とし（関、1997、p.238）、1972年の保健体育審議会答申では、学校施設以外の公共スポーツ施設を拡充することで、社会体育の充実が目指された。

一方で、スポーツの高度化が忘れられたわけではない。国際競技力の向上のために、学校教育を超えた年齢区分で長期的な一貫指導を実現できる民間スポーツクラブが広がっていった（松尾、2015）。こうした動きは、国民体育大会の参加対象者のカテゴリにも表れており、それまでの「一般」「青年（学生を除く 25 才未満）」「教員」「高校」という区分から、1975 年の第 30 回大会より「成年（開催年度 4 月 1 日時点で 18 才以上）」「少年（開催年度 4 月 1 日時点で 15 才以上 18 才未満）」という学校段階にとらわれない年齢での区分に変更された。1980 年代以降は、1989 年の日本オリンピック委員会の法人化や 1991 年の日本体育協会からの独立といったスポーツ界の民営化や、1993 年の J リーグの設立やスポーツ選手のプロ化といった商業主義化が進んでいった（関、1997；坂上、2018）。

こうした流れの中で、中学校・高校の運動部活動およびその競技大会も変容が迫られていった。戦前に誕生した校友会・運動部活動は、戦後教育改革の文脈で民主主義的な価値を期待されて再構築された。その後、1964 年のオリンピック開催に向けてその性質を選手中心主義へと変化させていった（内海、1998；神谷、2008；仁木、2011；中澤、2014）。中学校・高校競技大会も、強化すべき選手を発掘・育成するために重視されはじめ、オリンピック体制下に置かれるようになった。それを反映して、運動部活動の競技大会開催をめぐるのは全国高等学校体育連盟などの学校教育関係者と日本体育協会などの競技団体との間で交渉や調整が行われた（関、1997；金、2019）。

東京オリンピックが終わると、運動部活動は選手中心主義への反動から、1970 年代から 1980 年代にかけて、多くの生徒に平等に参加機会を与えるため、そして管理主義的な生徒指導手段として活用されて、拡大していった（中澤、2014）。また学校外では、社会体育の振興が図られ、民間・地域スポーツも台頭し発展していった（松尾、2015）。すなわち、ユーススポーツの大衆化が進められていった。では、もう一方の高度化の方はどうだったのか。

ユーススポーツの高度化という論点に関連して、この間、中学校・高校競技大会のあり方に直接的な影響を与えた政策は、文部省が定めた対外競技基準であった。その変遷を図表 1 に整理した。

対外競技基準は運動部活動の競技大会の範囲や数が過剰にならないよう抑制するために 1948 年に設けられたが、その内容は何度も改訂されてきた。詳しく見ると、中学校の競技大会は、1948 年通達では、校内大会までを原則とし、宿泊を要しない条件で都道府県大会まで許容された。この規制は、1954 年・1957 年通達で緩和され、都道府県大会までを原則とし、宿泊を要しない条件で広域のブロック大会まで許容された。その後 1961 年通達では、ブロック大会について宿泊を要しないという条件が無くなり、特例として水泳のみ全国大会が許容された。高校の場合、1948 年通達からとくに大きな変化は無く、都道府県大会までを原則とし、隣接都道府県でのブロック大会と、年 1 回の全国大会まで許容された。ただし、ここでは国民体育大会への参加は例外とされた。

その後、1969 年文部省通達では、対外試合がひとまず学校教育活動内と学校教育活動外に区別された。そこで後者のあり方を議論するために、日本体育協会や学校体育連盟、教育関係団体などで構成される「青少年運動競技中央連絡協議会」が設立されたが、この協議会は十全に機能したとは言えなかった（中澤、2014、p.116）。そのため、この通達以降、学校教育活動外の競技大会への規制が十分に及ばなくなり、事実上の規制緩和となった可能性を指摘できるだろう。その後、1979 年文部省通達・保体審答申では、学校教育活動内の競技大会として、中学では年 1 回の全国大会が、高校では年 2 回の全国大会が認められた。このように対外競技基準は徐々に緩和されてきたが、2001 年文部科学省通達で、ついに対外競技基準それ自体が撤廃された。なお、対外競技基準が撤廃されたこの 2001 年を、本発表では分析終了時期に定めている。

では、こうした戦後スポーツ史の流れと対外競技基準の変遷の中で、実際の中学校・高校競技大会は、どのように展開したのか。この問いに、先行研究は十分に答えられない。当時の運動部活動のあり方を検討した一連の研究（内海、1998；神谷、2008；仁木、2011；中澤、2014）も、中心的なイベントであるはずの競技大会に関しては、ほとんど分析してこなかった。そのため、いつごろ、どのような競技大会が開催されたのかが十分に把握されていない。

他方で松尾（2015）が指摘する通り、中学校・高校部活動以外の民間スポーツクラブは独自の

歴史的背景を持って発展しており、近年、ユーススポーツにおけるプレゼンスを高めている。こうした学校外のスポーツクラブの動向も視野に入れることで、現代までの運動部活動の拡大過程の様相をより多角的に理解し、戦後ユーススポーツの全体像に迫ることができるのではないかと。

以上の研究動向を踏まえながら、本発表は、1946年から2001年までの中学生・高校生年代の競技大会の展開を、各種資料を元に計量的に明らかにすることをめざす。

図表 1. 文部（科学）省通達における対外競技基準の変遷

改訂年	校内大会	市町村大会 (隣接学校)	郡市大会 (隣接市町村)	都道府県大会	ブロック大会 (隣接都道府県)	全国大会 (年1回)	全国大会 (年2回)	備考
1948	[中学の原則]……………(許容範囲※)				[高校の原則]……………(許容範囲)			
1954					[中学の原則]…(許容範囲※)			
					[高校の原則]……………(許容範囲)			
1957					[中学の原則]…(許容範囲※)			
					[高校の原則]……………(許容範囲)			
1961					[中学の原則]…(許容範囲) (水泳のみ特例)			
					[高校の原則]……………(許容範囲)			
1969					[中学の原則]…(許容範囲)			学校教育活動外 は別途検討
					[高校の原則]……………(許容範囲)			
1979					[中学の原則]……………(許容範囲)			
					[高校の原則]……………(許容範囲)			
2001								対外競技基準の 撤廃

出典: 中澤(2014, pp.112-113)を元に発表者作成。「※」は宿泊を要しない条件で許容された。

### 3. 扱う資料

資料として第一に、競技横断的に大会情報を把握するため、朝日新聞社編『運動年鑑』（1948-1953）、その後継誌の『スポーツ年鑑』（1954-1967）、そして日本体育協会編『日本アマチュアスポーツ年鑑』（1969-2002）を用いる。これらの資料の特長は、主催団体の種別によらず、競技横断的に中学生・高校生年代の競技大会の開催状況にある程度網羅的に把握できる点にある。例として、図表 2 に 1948 年度版『昭和二十三年度版 運動年鑑』の表紙と目次の画像を掲げておく。

第二に、競技別の詳細を把握するため、各競技団体の周年史・記念誌を用いる。具体的には、学校体育連盟や競技団体の周年史・記念誌など（『全国高体連四〇年史』や『日本陸上競技連盟八十年史』 etc）である。

第三に、それらを補足するために朝日新聞・読売新聞・毎日新聞の記事情報、関連ウェブサイトなどのインターネット情報（日本スポーツ協会の国民体育大会の記録集ウェブサイトなど）も活用する。

これらの資料から、1946年から2001年までの各種大会情報を蒐集できる。その中から中学生・高校生年代の選手を対象とした競技大会を抽出し、とくに全国大会の動向に焦点を絞って、競技大会の開催状況を整理する。

以上から本発表では、競技カテゴリ別に言うと、陸上競技、水泳（水球・シンクロナイズドスイミング含む）、バレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、ホッケー、野球、軟式野球、ソフトボール、テニス、ソフトテニス、バドミントン、卓球、ゴルフ、体操、ウェイトリフティング、ボクシング、レスリング、相撲、柔道、剣道、弓道、空手、なぎなた、銃剣道、少林寺拳法、武術太極拳、アーチェリー、フェンシング、射撃、ボート、カヌー、ヨット、自転車、馬術、山岳、近代五種（冬季近代二種含む）、スキー、スケート（アイスホッケー含む）、カーリング、ボウリング、綱引、ゲートボール、パワーリフティング、オリエンテーリング、トランポリン、ローラースケート、トライアスロン、ダンススポーツ、アメリカンフットボールの中学生・高校生年代の全国大会を蒐集できた。

発表当日はそれらの変遷を計量的に分析した結果を報告し、中学生・高校生年代の競技大会がどう展開してきたのかを明らかにしながら、戦後日本のユーススポーツを総括的に議論したい。

図表 2. 1948 年度版『昭和二十三年度版 運動年鑑』の表紙（左）と目次（右）



### 文献

石坂友司・松林秀樹編（2018）『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社。

内田良（2017）『ブラック部活動』東洋館出版社。

内海和雄（1993）『戦後スポーツ体制の確立』不昧堂出版。

内海和雄（1998）『部活動改革』不昧堂出版。

神谷拓（2008）「戦後わが国における『教育的運動部活動』論に関する研究」筑波大学博士学位論文。

金暉（2019）『全国高等学校総合体育大会の成立過程に関する研究』早稲田大学博士学位論文。

権学俊（2006）『国民体育大会の研究』青木書店。

坂上康博（2018）「日本」坂上康博・中房敏朗・石井昌幸・高嶋航編『スポーツの世界史』一色出版、pp.533-566。

島沢優子（2017）『部活があぶない』講談社。

関春南（1997）『戦後日本のスポーツ政策』大修館書店。

中澤篤史（2014）『運動部活動の戦後と現在』青弓社。

中澤篤史（2017）『そろそろ、部活のこれからを話しませんか』大月書店。

中澤篤史・鈴木楓太「戦前日本における中等学校競技大会の展開」『スポーツ科学研究』17、pp.44- 61。

中澤篤史・星野映（2021a）「戦後の中学校・高校競技大会に関する資料検討」日本スポーツ社会学会第 29 回大会発表資料。

中澤篤史・星野映（2021b）「中学生・高校生年代の競技大会の変遷に関する資料検討」日本スポーツ社会学会第 30 回大会発表資料。

仁木幸男（2011）『中学校の部活動の教育的効果に関する研究』早稲田大学博士論文。

松尾哲矢（2015）『アスリートを育てる〈場〉の社会学』青弓社。

山本雄二（2016）『ブルマーの謎』青弓社。

# アスリートに向けられる インターネット上のネガティブなコメントの実態

河野 洋（福山平成大学福祉健康学部）

## 1. 緒言

### 問題の所在

本研究が射程とする「アスリートに向けられるインターネット上のネガティブなコメント」とは、特定のアスリートを標的とした誹謗中傷・差別的な投稿・炎上現象などを指す。最近の事例として、バスケットボールの八村塁選手がインターネット上で日常的に人種差別的なコメントを受けていることを公表した。また、オリンピック・パラリンピック東京大会の開催をめぐって、競泳の池江璃花子選手にオリンピックへの参加辞退を要求するコメントが多数寄せられたことが報じられ、多くの人の知るところとなった。

ただし、これらの事例は氷山の一角であり、今日のインターネットにはアスリートの存在意義や人格を否定するようなネガティブなコメントが無数に認められる。スポーツ界はこれらのコメントの存在を、自らに課せられた重大な問題として認識していかなければならないといえる。

### 「もの言うアスリート」への反応

2021年4月、IOCはオリンピック憲章第50条の定める規制を緩和し、オリンピック・パラリンピック東京大会から競技会場での政治的・宗教的・人種的な宣伝行動を一部容認することとした。この変化にみられるように、最近のスポーツ界の動向としてアスリートに社会問題に対する主張や発言の権利を保障するための取り組みがなされている。

一方で、アスリートによる情報発信については、一般の人々がそれをどのように受け止めるかについても関心を持たなければならない。コロナ禍でのオリンピック・パラリンピック開催をめぐって、体操の内村航平選手やサッカーの吉田麻也選手などが、アスリートの立場から大会の開催や有観客試合を求めて発言をした。しかし、これらの発言はインターネット上のネガティブなコメントを誘発することとなった。今後もアスリートの情報発信の機会は一層拡大されていくと考えられるが、「もの言うアスリート」の存在がインターネット上でどのように受け止められるかによって、ネガティブなコメントの投稿に影響が出るものと考えられる。

### ネガティブなコメントを投稿する動機の変化

平井（2012）は2000年代を中心に日本のインターネットで起こった炎上現象を整理し、その原因について検討している。その中では、ネタ作りや悪ふざけといった炎上を楽しむ動機が認められている。しかし、山口（2016）が2016年に行った調査において、楽しむ動機に代わって人々を炎上に加担させたのは「正義感」や「使命感」であった。

田中・山口（2016）は2015年に起こった「五輪エンブレム騒動」について、デザインや法律の専門家が問題ないと判断したことに対し、インターネットが終始攻撃し続けたのはそこに「倒すべき悪」があったからだとしている。このような視点に立てば、アスリートに向けられるネガティブなコメントについても、それを「正しいこと」「必要なこと」だと考えている人がいることになる。このような中で、学術的なアプローチとしてインターネット上の「正義」の実態を明らかにすることは、ネガティブなコメントがもたらす問題の解決に向けた有益な知見になると考えられる。

## 研究の目的

本研究は、今日のスポーツおよびインターネットの背景を念頭に、アスリートに向けられるインターネット上のネガティブなコメントの実態を明らかにすることを目的とした。「もの言うアスリート」とネガティブなコメントとの関係、正義感や使命感に基づくネガティブなコメントの存在を、実際に投稿されたコメントから実証することとした。

なお、本研究が調査を実施するにあたっては、2020年8月に開催されたテニスのウエスタン&サザンオープンおよび9月に開催された全米オープンでの大坂なおみ選手に対するコメントを事例とすることとした。これは、大坂選手がこれまでスポーツを超えて様々な情報発信をしてきたことや、2020年5月以降に世界的に波及したBLM運動を背景に両大会で大坂選手が様々な行動を取ったことが、ネガティブなコメントの実態を知る上で有益な事例であると考えられたためである。

## 2. 方法

### データの収集と選定

2020年8月および9月に「Yahoo!ニュース」に掲載された、ウエスタン&サザンオープンおよび全米オープンに関する記事と、それらの記事に投稿されたコメントを収集した。収集された記事の中から、見出しまたは本文に「大坂」「なおみ」のいずれかの語を含むものを抽出し、各大会での大坂選手に関する記事を選定した。

### コメントデータの形態素解析

大坂選手に関する記事に投稿されたコメントデータについて、形態素解析によりコメント中出现する語とその出現回数を取得した。なお、形態素解析をはじめ本研究の調査でのテキスト処理には、計量テキスト分析ソフトの「KH Coder」(<https://kncoder.net/>)を使用した。

### 大坂選手を指す語の選定と分析用データの作成

インターネット上のコメントは大量に収集できるが、そのすべてが調査のための有用なデータになるとは限らない。本研究の関心はアスリートに向けられるコメントにあるため、「データクレンジング」の作業として、分析に不要と判断されるコメントを事前に取り除くこととした。

具体的には、文中に「大坂選手を指す語」が出現したコメントのみを分析に用いることとした。大坂選手を指す語は「大坂なおみ」「なおみ選手」のように語自体で判断できるものもあるが、「ハーフ」「スポーツ選手」「こいつ」などの語はコメントを精査する中でそれが大坂選手を指す語であると判断できる。これらの語を探索的に定義し、コメントデータ全体から大坂選手を指す語を含むものを抽出した。この作業によってデータ数は減少したが、本研究の関心である大坂選手に向けられるコメントのみを集めた分析用データが作成された。

### MDSによる出現語のマッピング

分析用データについて、MDS（多次元尺度構成法）によるコメントに出現する語のマッピングを行った。方法はKruskal、距離にはJaccard係数を使用し、2次元上にマッピングした。

## 3. 結果

### データの収集結果

2020年8月および9月に「Yahoo!ニュース」に掲載された、大坂選手に関する30件の記事が収集された。また、これらの記事に投稿された15,336件のコメントが収集された。

### コメントデータの形態素解析

収集されたコメントデータの形態素解析を行った結果、13,829種・239,440語が返された。

## 大坂選手を指す語と分析用データの選定

形態素解析の結果を参照しながらコメントの内容を精査した結果、大坂選手を指す語として 21 語が選定された。また、先述のコメント全体から大坂選手を指す語を含む 3,756 件を抽出し、分析用データとした。

大会名	記事数	コメント数
W&S	11	5,831
全米	19	9,505
合計	30	15,336

## MDS による語のマッピング

分析用データについて、MDS による語のマッピングを行った結果、図 1 のようになった。

表2 大坂選手を指す語

大坂選手を指す語	大坂選手を指す語
アスリート	プロ
コイツ	子
こいつ	女
スポーツ選手	大坂
ナオミ	大坂さん
なおみ	大坂選手
なおみさん	大阪
なおみちゃん	大阪さん
ハーフ	大阪選手
プレイヤー	奴
プレーヤー	

## 4. 考察

### MDS の結果の解釈

MDS はデータ間の関係を「距離」に基づいて図示するものである。本研究の調査で用いた Jaccard 係数は語の共起率を示すものであり、ひとつのコメント中にふたつの語が同時に出現する確率が高いほど、両者の距離は近いものとなる。今回の結果からは、「スポーツ選手」としての大坂選手の「主張」や「発言」に言及するコメントが多かったことや、「ボイコット」を「素晴らしい」と評価したコメントが少なかったことなどが読み取れる。

MDS のマップは必ずしも軸の解釈が可能とは限らないとされるが、今回の結果では軸に対する一定の解釈が可能であると考えられる。次元 1 (横軸) は、コメントのトピックが「コートの中の話か、外の話か」と解釈できる。左に行くほど大坂選手のプレーや試合結果、アスリートとしての大坂選手に向けられるコメントとなり、右に行くほどテニスとの関係性が低いトピックに対するコメントとなる。

次元 2 (縦軸) は「大坂選手に対してポジティブか、ネガティブか」と解釈できる。下に行くほど大坂選手に対する肯定的・好意的なコメントとなり、上に行くほど否定的で侮蔑や嫌悪を示すコメントとなる。ただし、MDS の軸は基準値を持たないため、次元 2 の 0 のラインが大坂選手に対

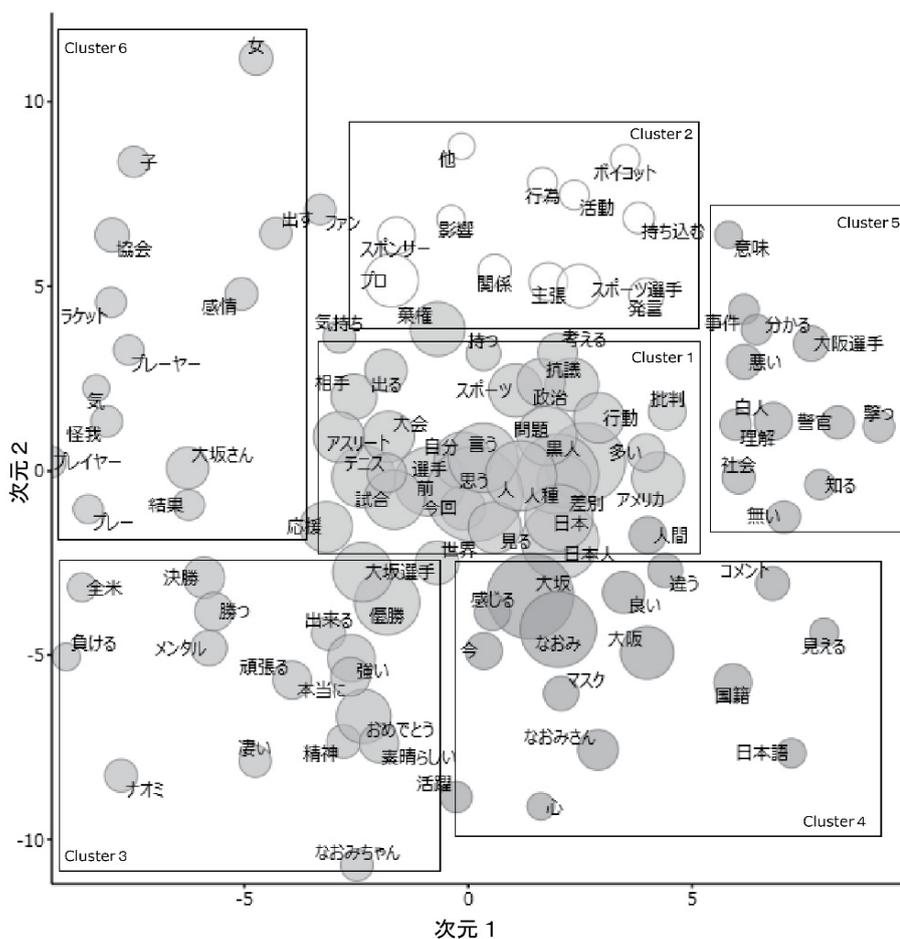


図1 MDSによる出現語のマッピング

するニュートラルで中立なコメントを意味するわけではないなど、解釈には注意が必要である。

また、マッピングされた語は6つのクラスターに分類された。これらのクラスターは2大会での大坂選手に関する主要なトピックを示すものとして解釈ができる。クラスター1ではスポーツの場で政治的行動を取ることに、クラスター2ではウエスタン&サザンオープンでのボイコット表明、クラスター3では全米オープン優勝、クラスター4では全米オープンでのマスク入場、クラスター5ではBLM運動、クラスター6ではプレー中のラケット破壊行為がそれぞれトピックとなっている。

以上の解釈に基づけば、本研究の関心である大坂選手に向けられるネガティブなコメントは、特にクラスター1・2・5・6でその存在が認められると考えられる。

### 「もの言うアスリート」に向けられるネガティブなコメント

2大会における大坂選手の主張や発言を「スポーツ選手」として評価したとき、それを「スポーツに政治を持ち込む行為」だとするコメントが認められる。BLM運動の正当性（「黒人もアジア人を差別している」「破壊行為は別問題」など）が議論される前に、大坂選手がBLM運動に関わること自体が否定されているといえる。

大坂選手のこれまでの情報発信から、彼女を「もの言うアスリート」と捉える人は少なくないと思われる。大坂選手に向けられるネガティブなコメントの一部は、「もの言うアスリート」を黙らせようとするものである。スポーツ界の動向とインターネット上の理解には隔たりがあり、その中で起こる誹謗中傷や炎上はアスリートの自己責任とされているのが実情といえる。

### よりよいスポーツをめぐるインターネット上の正義

スポーツに政治を持ち込むこと、プロスポーツ選手が試合をボイコットすることやアスリートが道具を破壊することについては、インターネット上でその是非が問われているといえる。一部の人はこれらの行為を望ましくないと考えるが、現実社会でこれらの行為が積極的に議論されることはない。このような中で、彼らをネガティブなコメントの投稿へと突き動かしているのが正義感や使命感ということになる。アスリートに向けられるネガティブなコメントの背景にあるインターネット上の正義とは、自分たちこそがスポーツをよりよい方向へ導いているという自負にある。

アスリートに向けられるネガティブなコメントの一部は、アスリートの自己実現とインターネット上の正義との摩擦が引き起こすものである。ただし、アスリートとインターネットとが直接対立する今日の状況に対し、スポーツ界がその改善のため行動しなければならないと考える。当事者でない者がインターネット上の炎上を放置することは簡単であるが、アスリートが受ける批判の中にスポーツ界全体で議論すべきものがあることを認識しなければならない。

## 5. まとめ

本研究はアスリートに向けられるインターネット上のネガティブなコメントの実態を、投稿されたコメントから実証的に明らかにすることを目的とした。2020年の大坂なおみ選手に向けられたコメントを事例とし、スポーツとインターネット双方の背景を念頭に検証を行った。

調査の結果、スポーツについてのトピックがどうかに関わらず、大坂選手に向けられるネガティブなコメントの存在が認められた。また、「もの言うアスリート」の存在自体を否定するコメントや、正義感や使命感に基づくネガティブなコメントの存在が明らかとなった。

### 参考文献

- 平井智尚 (2012) 「なぜウェブで炎上が発生するのか—日本のウェブ文化を手がかりとして」、情報通信学会誌, 29(4), pp.61-71.
- 田中辰雄・山口真一 (2016) 「ネット炎上の研究」、勁草書房.
- 山口真一 (2016) 「炎上加担動機の実証分析」、2016年社会情報学会 (SSI) 学会大会予稿集.

# 海外柔道家の柔道参加動機と学習効果： オランダ・ベルギーの柔道家を対象として

北村尚浩, 中村勇, 前阪茂樹 (鹿屋体育大学)

## はじめに

中学校における武道必修化には、武道の学習を通じて我が国固有の伝統と文化により一層触れることができるようにする(文部科学省, 2008) 狙いがあった。その教育効果には教員と生徒との間に若干のギャップはあるものの、一定の評価が得られていることが報告されている(Kitamura et al., 2016: 2017; 北村ら, 2017)。また、欧州の柔道実施者は日本の実施者に比べて運動そのものに対する関心が高く、日本の伝統文化的側面よりもスポーツの一種目として志向していることも示唆されている(北村ら, 2017)。ブルース(2008)によれば、元来、武道は海外に移住した日系人社会でそこに生きる人々が日系人の価値や姿勢を学び、また、文化を再確認するものとして理解されていた。一方で、武道の国際化、国際的な普及によるいわゆる武道のスポーツ化を危惧する声も聞かれ(日本武道学会, 2008)、多様な文化や価値観の中で武道の持つ伝統性と国際化との難しさが指摘されてきた。

そのような中、北村ら(2018)はフランスとオランダの柔道クラブに所属する青少年を対象として、社会的、文化的背景の異なる国の人々の柔道への参加動機と達成目標を検討した。そして、柔道に対して海外から伝播した異国の文化を包含する身体活動動という認識は強くなく、スポーツの一種目としてそれぞれのスポーツ文化に根ざしていることを明らかにしている。このことは溝口(2016)が指摘するように、文化的相対主義の潮流の中でそれぞれの国に合った文化の中で変容していく柔道の姿を示唆するものといえよう。

本研究では、オランダ・ベルギーの柔道家の柔道参加動機と柔道による学習効果を、武道のグローバル化・スポーツ化の視点から明らかにすることを目的としている。海外の人々がどのようなきっかけ(internal motivation)で柔道を開始し、柔道の練習を通して何を学習しているのかを明らかにすることは、海外での武道の普及やその背景に横たわる日本文化の理解を促進するとともに、日本国内での武道の普及を考える上で意義のあることと考える。

## 方法

### 1) 調査の概要

オランダとベルギーの柔道家を対象として、オランダ柔道関係者を通じて調査を依頼し、2020年12月8日から2020年12月28日にかけてMicrosoft Formsを用いたインターネット調査を行った。調査内容は、個人的属性、柔道実施状況、柔道参加動機、柔道による学習効果、柔道の伝統・文化性などである。柔道参加動機はTwemlowら(1996)による武道参加者の参加動機(internal motivation)に関する尺度に「両親、友人、あるいは他の人たち」「海外の文化を理解する」の2項目を加えた15項目を用いた。柔道による学習効果は、学習指導要領に示された教科の目標ならびに各分野の目標及び内容に記述された文言を参考に作成した。

回答が得られた169名(オランダ130名、ベルギー39名)の属性を表1に示している。性別では男性が74.6%、女性が24.3%で、平均年齢は41.1±19.0歳であった。

### 2) 分析方法

柔道の参加動機については、「A. とても影響した」「E. 全く影響しなかった」の評語の中間に「C. どちらでもない」の評語を置いた5段階のリッカートタイプ尺度で尋ね、5段階の評定順にそれぞれ5から1の得点を与えて数量化した。柔道による学習効果については、「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」、柔道の伝統・文化性については、「感じない」「あまり感じない」「やや感じる」「感じる」の4段階のリッカートタイプ尺度でそれぞれ尋ね、4段階の評定順にそれぞれ1から4の得点を与えて数量化した。

表1 サンプルの属性

	n	%
性別		
男性	126	74.6
女性	41	24.3
N.A.	2	1.2
年齢 41.0±19.0 歳		
10 歳代	23	13.6
20 歳代	42	24.9
30 歳代	13	7.7
40 歳代	23	13.6
50 歳代	27	16.0
60 歳代	21	12.4
70 歳代以上	13	7.7
N.A.	7	4.1

## 結果

### 1) 柔道実施状況

サンプルの柔道実施状況を表2に示している。柔道歴は平均 31.0±17.80 年で、83.4%が有段者（黒帯）であった。柔道を週1回以上実施している者の平均実施頻度は 3.22±1.32 回、1回あたりの平均練習時間は 1.48±0.37 時間であった。競技レベルとして、出場経験のある最もレベルの高い大会を尋ねたところ、国際大会と回答した者が半数近く（47.9%）に上り、次いで全国大会（22.5%）、地域大会（10.1%）の順であった。

表2 柔道実施状況

	n	%		n	%
段位			競技レベル <sup>注)</sup>		
段位なし	27	16	市大会	16	9.5
有段者	141	83.4	地域大会	17	10.1
N.A.	1	0.6	地区大会	13	7.7
柔道歴	31.0±17.80 年		全国大会	38	22.5
練習頻度	3.22±1.32 回/週		国際大会	81	47.9
練習時間	1.48±0.37 時間/回		N.A.	4	2.4

### 2) 柔道参加動機

参加動機項目について数値化し、その平均値を表2に示している。「楽しみのため」(4.58±0.84)、「ひとつのスポーツとして」(4.09±1.17)、が4点以上の値を示し、その他「運動として」(3.92±1.26)、「両親、友人、他の人たち」(3.61±1.47)、「自己鍛錬のため」(3.23±1.40)、「試合、大会への参加」(3.13±1.45)、「健康増進のため」(3.10±1.47)、「自信をつけるため」(3.01±1.52)が3点以上の値を示した。

表3 柔道参加動機

項目	n	mean±S.D.
楽しみのため	159	4.58±0.84
ひとつのスポーツとして	161	4.09±1.17
運動として	158	3.92±1.26
両親、友人、あるいは他の人たち	160	3.61±1.47
自己鍛錬のため	159	3.23±1.40
試合、大会への参加	159	3.13±1.45
健康増進のため	157	3.10±1.47
自信をつけるため	158	3.01±1.52
なりたい自分になるため	157	2.89±1.41
自己防衛のため	164	2.62±1.44
海外の文化を理解する	157	2.20±1.23
怒りのはけ口として	156	2.10±1.32
精神修養として	155	1.97±1.25
武道映画の影響	154	1.55±0.98
有名になるため	155	1.20±0.61

### 3) 柔道による学習効果

海外の柔道家は、柔道を通して何を学んでいるのか。柔道を行うことによる学習効果について尋ね、数値化した平均値を表4に示している。今回、学習効果として提示した項目のうち最も高い値を示したのは「自分に合った運動の技能を身につけることができた」(3.89±0.34)で、次いで「運動を豊かに実践するための基礎的な知識や技能を身につけることができた」(3.87±0.35)、「体力を高めることができた」(3.87±0.37)、「ルールや仲間を称賛するなどマナーを守ろうとする態度が身についた」(3.87±0.36)と続いている。

一方、日本や武道の文化、伝統に関する項目「日本の伝統文化に触れることができた」(3.40±0.85), 「日本の伝統文化を理解することができた」(3.34±0.77), 「武道の伝統的な考え方を理解することができた」(3.34±0.79) は相対的に低い値を示した。

表4 柔道の学習効果

項目	n	mean±S.D.
自分に合った運動の技能を身につけることができた	167	3.89±0.34
運動を豊かに実践するための基礎的な知識や技能を身につけることができた	166	3.87±0.35
体力を高めることができた	167	3.87±0.37
ルールや仲間を称賛するなどマナーを守ろうとする態度が身についた	167	3.87±0.36
運動の楽しさや喜びを味わうことができるようになった	167	3.84±0.47
体力の高め方を理解することができた	167	3.80±0.45
全力を尽くして積極的に運動に取り組む態度が身についた	168	3.79±0.48
自分に合った運動を見つけることができるようになった	168	3.77±0.58
バランスのよい心身の発達が図られた	167	3.61±0.62
仲間との協同経験ができた	166	3.61±0.66
仲間とのチームワークが高められた	156	3.59±0.64
礼儀正しさが身についた	168	3.58±0.63
自分の健康や、自分や仲間の安全に配慮できるようになった	167	3.57±0.59
自分の役割を果たそうとする態度が身についた	165	3.56±0.65
相手を思いやる態度が身についた	167	3.56±0.71
相手を大切にすることができるようになった	164	3.55±0.66
仲間と積極的に関わろうとする態度が身についた	167	3.49±0.65
勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができるようになった	166	3.48±0.85
日本の伝統文化に触れることができた	166	3.40±0.85
日本の伝統文化を理解することができた	167	3.34±0.77
武道の伝統的な考え方を理解することができた	167	3.34±0.79
自分の意思を相手に伝える能力が身についた	168	3.09±0.89

#### 4) 柔道の伝統・文化性

日頃の柔道活動の中で、どのようなところに日本の伝統や文化を感じるかを尋ねて数値化し、その平均値を算出したところ、いずれの項目も 3.5 以上の値を示した(表 5)。「試合前後の礼」(3.85±0.37), 「座礼・立礼」(3.81±0.48), 「相手へ礼儀を払う」(3.80±0.44) の順で 3.8 以上の値となり、設定した項目の中で高い値を示した。

表5 柔道の伝統・文化性

項目	n	mean±S.D.
試合前後の礼	165	3.85±0.37
座礼・立礼	163	3.81±0.48
相手へ礼儀を払う	165	3.80±0.44
柔道衣	165	3.78±0.47
柔道の技	165	3.73±0.54
畳	165	3.70±0.51
正座	164	3.65±0.57
作法	165	3.64±0.59
裸足で行う	165	3.57±0.75
受け身	165	3.54±0.72

#### 考察

本研究で明らかになったオランダとベルギーの柔道家らの参加動機は、レジャー、スポーツの一つであると捉えていることが示され、自己実現や異文化理解といったものは柔道参加へのきっかけとしては弱いことが明らかになった。海外の人々が武道に参加する動機としては、自己防衛、健康づくり、鍛練などが典型的な動機として挙げられている(Columbus & Rice, 1998)が、北村ら(2018)は、海外に伝播した柔道が各々の国で制度化・組織化されて普及が進み、それぞれの国のスポーツ文化への融合が図られる一方で、日本で武道の教育効果として期待されているような、いわゆる武道の本質的側面はそれぞれの国における普及のプロセスの中で希薄化していると指摘している。このことは、柔道を通して何を学んだのかという問いに対する回答からも運動の技能や体力、運動の楽しみなどが相対的に高い一方で、日本の伝統や文化については低い様子からも窺える。

また、日頃柔道を行う中で礼法や柔道衣、技などの伝統・文化性は感じ取っていることも明らかになった。つまり、彼らが柔道をスポーツの一つと捉えて活動しつつも、そこには日本の伝統文化が包含されていることを認識していると考えられる。

## まとめ

本研究では、海外柔道家の柔道参加動機と柔道による学習効果を武道のグローバル化・スポーツ化の視点から明らかにするため、オランダとベルギーの柔道家に対するインターネット調査によって収集されたデータを通して検討を進めた。主な結果は以下のとおりである。

1) 柔道への参加動機としては、レジャー、運動・スポーツの一つとして捉えられており、自己実現や異文化理解といった側面は弱い、

2) 柔道を通しての学習効果としては、運動の技能や体力、運動の楽しみなどが相対的に高く、日本の伝統や文化については低い、

3) 日頃の活動の中で、日本の伝統・文化性を感じ取っている。

これらのことから、今回のサンプルであるオランダとベルギーの柔道家は、柔道をスポーツの一つと捉えており、いわゆる武道のスポーツ化の側面が垣間見られた。その一方で、日本の伝統・文化としての側面も包含された活動であることが認識されていることも明らかになった。

注) オランダで開催されている柔道の大会には、lokaal toernooi (市内で行われるレベルの大会)、regionaal toernooi (隣接する複数の市で行われる大会)、districtstoernooi (オランダ北部、中部、南部など7つの district があり、その district の試合)、nationaal toernooi (全国大会)、internationaal toernooi (国際大会) がある。これらをそれぞれ、市大会、地域大会、地区大会、全国大会、国際大会と表記した。

## 文献

- ブルース・ミッシェル (2008) 柔道の国際化. 武道学研究 40 (3), 22-32.
- Columbus P. J. & Rice D. (1998) Phenomenological meanings of martial arts participation. *Journal of sport behavior* 21(1), 16-29.
- Kitamura T, Elmes D, Kawanishi M. (2016) Educational impact of budo as a compulsory program in Japanese junior high school. *Sport in the City: Mobility, Urbanity and Social Change, 13th EASS conference Book of Abstract*, 68.
- Kitamura T, Kawanishi M, Elmes D. (2017) Student physical competence and the educational impact of budo in junior high schools in Japan. *The Values of Sport: Between tradition and (post) modernity, 14th EASS Conference, Abstract book*, 59.
- 北村尚浩, 前阪茂樹, 濱田初幸, 川西正志 (2017) 中学校における武道教育の課題：自由記述データの計量的分析. 武道学研究 50(1), 29-38.
- 北村尚浩, 川西正志, 濱田初幸, 前阪茂樹 (2018) フランスとオランダにおける青少年柔道参加者の参加動機と達成目標. 鹿屋体育大学学術研究紀要 56 : 5-13.
- 溝口紀子 (2016) 柔道の未来選択の位相：ヨーロッパ・フランス柔道から読み解く. 一橋大学スポーツ研究 35 : 99-106.
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説：保健体育編. 東山書房.
- 日本武道学会 (2008) 武道の国際化に関する諸問題. 武道学研究 40 (3) : 17-66.
- Twemlow, SW, Lerma, BH, Twemlow, SW (1996) An analysis of students' reasons for studying martial arts. *Percept Mot Skills* 83 (1) : 99-103.

# ボディビル競技における 「のめり込み」を惹き起こす要因とその過程に関する 実証的研究

堀田文郎(立教大学大学院 博士課程前期課程) 松尾哲矢(立教大学)

## I. 緒言

日本ボディビル・フィットネス連盟は、「ボディビル競技」について「日頃のきびしいトレーニングで鍛え上げた全身の筋肉の発達度、そのダイナミックさ、美しさ、またバランスなどを競い合う個人スポーツ」(日本ボディビル・フィットネス連盟, online)と定義している。

このボディビル競技は以前より、薬物問題を抱えてきた。例えば、世界アンチ・ドーピング機関(2020)によると、2019年にボディビル競技で実施されたドーピング検査の陽性率は20%と非常に高かった。また、プロボディビルダーの間では薬物使用が公然の秘密とされるほどに普及しているとの指摘もある(増田, 2000)。これらの薬物問題に加え、ボディビル競技では過度な減量により死亡した競技者の存在が報告されている(東京新聞, 2020, online)。以上を踏まえるとボディビル競技には、たとえ薬物使用までは至らずとも、競技に強くのめり込む競技者が数多く存在すると考えられる。

このような状況の一方で、ボディビル競技に関する先行研究は、ボディビルダーの基礎代謝と身体活動レベルの検討を行った山本ら(2008)や除脂肪及び筋肥大の最適な方法を確立することを目的とした岡田ら(2015)など、その大半を占めるのが競技方法に関する研究や生理学的な研究であり、社会学的な研究は竹崎の一連の研究(2015, 2019)に限定されている。

そのうち、竹崎(2015)は男性高齢者ボディビルダーを事例に、彼らがいかにしてボディビルの価値を構築しているのかについて分析を行い、男性高齢者ボディビルダーが自身にとってのボディビルの価値を「身体」を媒介とした「普通の高齢者」との差別的関係から認識していることを明らかにした(竹崎, 2015, pp.54-56)。一方で、ボディビルダーではない「普通」の者たちがどのようにしてボディビルダーとなっていくのか、という動的な過程については明らかにされていない。

また、竹崎(2019)は日本のボディビル文化を対象とした歴史研究を行い、ボディビル文化が戦後占領期にアメリカから日本に導入され、日本における男性身体の意味が変容した一方で、ボディビルにおける理想の身体像も「日本人」男性としてのあり方との葛藤の中で変容していった過程を明らかにしている(竹崎, 2019, pp.689-702)。しかし、特定の日本人男性がなぜ、ボディビルダーとなっていたのか、という動的な過程については先の論文と同様に論じられていない。

以上の先行研究の検討を踏まえ、本稿ではボディビル競技者が競技へののめり込む要因とその過程を明らかにすることを目的とする。

## II. 分析枠組みと作業仮説

特定の行為者が競技者となり、その社会的世界へと没入していく過程について分析した研究として、石岡(2012)やヴァカン(2013)のボクシング研究が挙げられる。石岡(2012)はフィリピンに暮らすローカルボクサーを事例に住み込み調査を実施し、見習いボクサーが集団生活、集団練習を送りつつ、自身の肉体を変工することによって一人前のボクサーとなっていくことや、マニラに暮らすローカルボクサーにとって、ボクシングは単なるスポーツ実践としてだけではなく、貧困世界を生き抜くための生活実践として生起していることを明らかにした。また、実際に自身が見習いボクサーになるという特徴的な手法を用いて、シカゴの黒人ゲットー地区にあるボクシングジムにおいて調査を行ったヴァカン(2013)は、ゲットーに暮らす特定の黒人男性がボクサーになる社会的な力学をゲットーとジムの「共生と対抗という二重関係」という構図より描き出した。また、ヴァカンは

見習いボクサーが肉体的・精神的修練を通じて漸次的にボクサー化していく様子を記述しつつ、「ボクサーを創り上げるのは、『身体的そして道徳的な力の束としての』ジム全体の『小さな環境』なのである」(ヴァカン, 2013, p.186) と論じている。

以上の議論から、ボディビル競技においても「競技空間」と「生活空間」の双方の論理が相互に作用することによって競技者を競技へのめり込ませる機制が形成されている可能性があり、「競技空間と生活空間」という位相の議論に着目する必要性があることが示唆された。

この位相に加え、両者の研究からは、ボディビル競技における「のめり込み」という現象を捉えるにあたって、「肉体と競技者」及び「競技者と競技空間」という二つの位相に着目する重要性も示唆された。そこで本稿では、これら三つの位相を接合させたうえで分析枠組みを作成するために人間の自我の主体性と社会性とを相即的に捉えようと試みたミードの自我論を援用した。

ミードは自身の自我論の中で、子供の自我形成について、子供は「プレイ」と「ゲーム」の二つの段階を通して、他者の視点から自分自身を経験することを学習し、それにより自我が社会的に形成されていくと論じている(ミード, 1975)。また、ミードによると人間の自我は時間的な広がりを持っており、過去は「記憶イメージ」として現在の行為を条件づけ、未来は「想像イメージ」として現在の行為を方向付ける機能を果たすという(ミード, 2001)。

これに加え、ミードは、他者の期待をそのまま受け入れ、自我の社会性を表す「客我」と「客我」に対する反応である「主我」という二つの概念を導入することで自我の主体性を捉えようと試みた。ここにおいて、船津(2000)は「主我」概念を「創発的内省性」を表すものとして解釈する。「創発的内省性」について船津は、「創発的内省性とは、自分の内側を振り返り、そこから新しいものが生み出されることである。しかも、他の人間の目を通じて客観的に自分を見て、そこから自己の修正、再構成を行い、そこに新しいものを生み出す」(船津, 2000, p.70)と論じている。

本稿ではこのミードの自我論、すなわち、人間の自我が他者との関わりの中から社会的に形成されるという議論、また、人間は自分自身に対する内省を通じて自己を修正していくという議論を分析枠組みの作成にあたり援用した。

以上の議論を踏まえ、図1に示すような分析枠組みを設定し、以下の作業仮説を設定した。第一に、競技者は自身の肉体を絶えず内省し肉体に修正を施していく一方で、記録(過去の自分)と競技実践を行うことでもたらされる成果(未来の自分)に条件・方向づけられ、競技へのめり込んでいくと考えられる。また第二に、競技者はボディビル競技における競技空間に身を置くことで十全なボディビル競技者と化していくと同時に、競技空間の論理と生活空間の論理とが作用しあうことで競技へのめり込んでいくと考えられる。

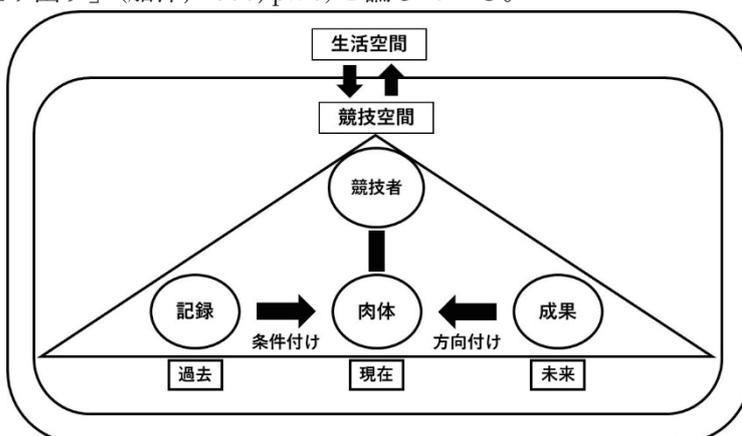


図1 分析枠組み

表1 サンプル特性

	年齢	競技歴/ トレーニング歴	競技成績
A	23	4年/7年	全日本レベルの学生大会にて優勝、等
B	23	3年/7年	地区レベルの大会にて入賞
C	23	0年/8年	本年度大会への出場を予定
D	24	0年/9年	学内での大会に出場、本年度大会への出場を予定
E	24	5年/9年	東日本レベルの大会にてカテゴリー別優勝、等
F	26	5年/11年	都道府県レベルの大会にて優勝、等
G	27	9年/13年	都道府県レベルの大会にて総合優勝、等
H	32	10年/17年	関東レベルの大会にて2位入賞、等
I	32	6年/17年	都道府県レベルの大会にて4位入賞
J	46	23年/32年	関東レベルの大会にて優勝、等
K	59	8年/45年	都道府県レベルの大会にて優勝、等

### III. 調査概要

#### 1. 調査対象者

ボディビル競技の大会(コンテスト)に出場経験・予定のある競技者計11名。

#### 2. サンプル特性(表1)

本研究では競技に専心していると考えられる20代の競技者を中心に調査対象者を選定し、表1のボディビル競技者11名にインタビュー調査を実施した。

### 3. 調査方法

半構造化インタビューを一人当たり約2時間実施した。

### 4. 主な質問項目

本研究における主な質問項目は、①競技に関する個人史(ボディビル競技との出会い、競技実践の変化、競技に対する意識の変化)、②競技者と肉体(鏡に映る自身の肉体の捉え方、自身の肉体に対する評価)、③競技者と競技空間(競技者にとってのジムとは、ジムにおける他の競技者との交流について)、④競技空間と生活空間(私生活の送り方、日常生活に競技が占める割合)、⑤競技実践(現在のトレーニングメニュー、食事内容)、⑥競技意識(一見苦痛を伴うように思える競技実践を続ける理由、自身にとってのボディビル競技とは)である。

### 5. 倫理的配慮

本研究におけるインタビュー調査にあたっては、立教大学コミュニティ福祉学部・研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号: KOMI20011A)。本研究は対象者の匿名性に十分配慮し、対象者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないように心がけ、また、データの管理に関しても十分な管理を行っている。対象者にはインタビュー前に研究目的、概要、参加によるリスク、個人情報の取り扱い、利益相反等について説明し、同意書にサインを得た上で同意撤回書を呈した。

### 6. 分析方法

本研究では修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析を進めた(木下, 2007)。具体的な手順としては、①データの逐語化、②オープンコーディング(データから概念を生成)、③選択的コーディング(概念と概念の関係を検討し、カテゴリーを生成)、④概念、カテゴリー間の関係を結果図として提示、である。M-GTAを採用した理由としては、本研究がM-GTAの特徴であるプロセスの性格を有していることに加え、M-GTAを用いることでデータに即した分析結果を得ることができ、得られた知見を実践的な現場へ還元しやすくなるためである。

## IV. 結果

分析の結果、35の概念及び7つのカテゴリー(第1のカテゴリーには3つのサブカテゴリーを含む)が抽出された。以下、ボディビル競技者が競技へのめり込む要因とその過程に適合すると判断された35の概念に従って、7つのカテゴリーについて記述する。

### 1. 【目的化するウェイトトレーニング】

表2 カテゴリー1に含まれる概念と発言例

サブカテゴリー	概念名	発言例
手段としてのウェイトトレーニング	競技パフォーマンス向上のためのウェイトトレーニング	「いやあ、強くなるためにはもっとバーベルを挙げなくてはいけない。それで空手の補強で始めました」(競技者K)
	「モテる」ためのウェイトトレーニング	「入りは承認欲求、周りにモテたいとか『すごい』って言われたっていうのから入って」(競技者D)
	部活動の一環としてのウェイトトレーニング	「ウェイトトレーニングってことに関して言えば、高校に入った時にラグビー部でウェイト室があってベンチプレスをやられたっていうのが初めてかもしれない」(競技者C)
努力を裏切らない筋肉	見返りを得られるボディビル競技	「ボディビル始めてからはものすごい体が大きくなっていったんですよ。やっぱそれがあるのが、見返りがあるのが大きいっていうのはありますよね」(競技者A)
	やった分だけ成果が得られるボディビル競技	「今までの人生で部活もスポーツも何もかもほめられてなくて。ただ、練習だけは褒められてきて。『よく頑張るね』みたいな。練習を本番に生かすのが僕すごい苦手なタイプなんです。でも、ボディビルだけはやった分だけ返ってくるじゃないですか」(競技者F)
	確実に得られる成果	「(陸上は)やっぱ伸びないんですよね。頑張って走ったって。例えば、練習でよくても本番でダメとか全然あるんですけど、トレーニングに関してはあんまりそういうのないんで」(競技者G)
ウェイトトレーニングの目的化	ウェイトトレーニングの目的化	「周りの人間から『競技者Hは普通の練習(ラグビーの練習)の時よりトレーニングの時の方が生き生きしてた』っていまだに言われるくらいだったんで」(競技者H)

以上の7つの概念(表2)から、ボディビル競技者にとってウェイトトレーニングは当初、他の目的を達成するための手段であった一方で、やればやった分だけ成果が得られるという経験することによって、ウェイトトレーニングが目的化されていく様相が看取され、【手段としてのウェイトトレーニング】、【努力を裏切らない筋肉】、【ウェイトトレーニングの目的化】という3つのサブカテゴリーと【目的化するウェイトトレーニング】というカテゴリーが抽出された。

## 2. 【ボディビル競技者化する見習い競技者】

表3 カテゴリー2に含まれる概念と発言例

概念名	発言例
環境によるボディビル競技者化	「大井町のサウス東京(ゴールドジムサウス東京店)あるじゃないですか。最初は『なんだここは!』って感じで。普通のフィットネスクラブとはちげーなって感じになって、そこから少しずつボディビルって何なんだとか、そこでトレーニングしている人たちはやばい人たちなんじゃないかって思って、段々興味をもって、最終的にゴールドジムの会員になりつつ、ここで働きて一なーって」(競技者H)
ボディビル競技者に対するあこがれの形成	「その頃にちょうどテレビかなんかで鈴木雅さん(日本を代表するトップボディビルダー)が出てて、ゴールドジム芸人かなんかで、アメトークのやつで雅さんが出てて、この体ヤベェ!みたいな。これ、筋トレ続けてったらこうなれるんかなって」(競技者E)
古参競技者からの学習	「そこにとびぬけてすごい人がいて、その人みたいな体になりたいなっていうのがあって、それもスタッフさんなんだけど。その人に『どうしたらなれますか』っていうのをいろいろ聞いて、で、そのスタッフさんもいろいろ教えてくれてっていうのはあったよね」(競技者J)
「師匠」との出会いと学び	「(自分の師匠は)トレーニングまで全部見てくれる。ボディビルっていう全てを。ポージングからトレーニングから。だから、なんていうんだろうな。先生っていうよりも、もっと身近な存在」(競技者E)

以上の4つの概念(表3)から、見習い競技者は「ジム」という環境に身を置くことや他のボディビル競技者とのかかわりを通してボディビル競技における技能やものの見方を学習し、競技者化していくことが示唆され、【ボディビル競技者化する見習い競技者】というカテゴリーが抽出された。

## 3. 【「足りない」筋肉】

表4 カテゴリー3に含まれる概念と発言例

概念名	発言例
肉体に対する内省と足りない筋肉	「ボディビルダーが鏡を見てると、『あれはナルシストだ』とかよく言うじゃん。そういう人もいると思うんだよ。でも、そうじゃないのよ。本来的には『肩のここがもっと付けばいいんだけどなあ』とか、『ここがもうちょっとなあ』とかそうやって見てる人がいい選手だと思うよ。じゃなくて、自分の体見て満足して、かっこいいなあって、それがモチベーションになって、競技の時にはつらつとやれるってのもあると思うよ。だけど、どっちかというところ、『ああ、もうちょっとここがあったらいいなあ』とか『このふくらみがあったらなあ』っていう風な感じで鏡って見るね」(競技者K)
自身の肉体に満足することができない競技者	「絶対自分の体かっこいいと思わないですもん。『しょぼ』、『キモ』って思いながら毎日見て、コンテストの日も『キモいなあ。なんでこんなガリガリなんだよ』って思いながら出て、たまたま勝って、『うわー、でも、あそこがもっとこうだったらなあ』とか思いながら次のトレーニングに入るんで、だから自分の体かっこいいと思った日はないんですよ」(競技者F)
自身の肉体に対する評価の低下	「(自身の体に対する評価が)下がっていききましたよ。何なら右肩ががりじゃないですか」(競技者G)

以上の3つの概念(表4)から、ボディビル競技におけるものの見方を内面化した競技者は、学習した価値基準を基に自身の肉体と向き合い、内省を行っていることが示唆された。ここにおいて、競技者は自身の肉体に不満を覚えつつ、常にその修正点を意識し、思い描く理想の肉体との差異を埋めべく競技実践を行っている様相が看取され、【足りない筋肉】というカテゴリーが抽出された。

## 4. 【ボディビル競技へと収斂する私生活】

表5 カテゴリー4に含まれる概念と発言

概念名	発言例
24時間ボディビル	「谷野さん(日本を代表するトップボディビルダー)が言うみたいに『寝てる間も闘っている』みたいな。それと同じで24時間やらなければ、成果が返ってこない。他の競技ってそうでもなくて、多分。例えば柔道も相撲も、野球とかもそうだけど、練習ガツってやってオフは切り替えて体を休めてたりしても全然、成果返ってくるけれど。ボディビルはそこが大きな違いだと思う」(競技者C)
トレーニングだけではつかない筋肉	「トレーニングっていうのは『筋肉を作れよ』っていう信号をただ送っただけのこと。じゃあ果たしてそれで筋肉ができればいいんだけど、できない。それは何ですかっていうと、寝ないと、休息しないとダメなんです。あとは食事なんですよね、摂らないと。それも一食じゃなくてね」(競技者J)
競技のために書き換えられていく「日常」	「(競技に集中したくて)結婚を決めてた人とも別れたし、結局コンテストのために全部集中しようと思って一人暮らしを始めたし、環境もトレーニングの時間をしっかりとるために仕事のシフトも全部ずらして、だから今はほんとにトレーニングとかコンテストのために一番生きやすい環境にしてあるって感じです」(競技者F)
生活の基礎となるボディビル競技	「朝8時にご飯食べたなら11時にプロテイン飲まないといけないからこの間は何をする、みたいな。11時にプロテイン飲んだら2時とか3時とかには次の栄養を入れたいからその間に何をするか、みたいな感じでスケジュール組んでた。食事とトレーニングのタイミングを軸にして一日の予定を組んでましたね」(競技者D)
トレーニングのルーティン化	「(トレーニングを)意識的にしてたわけじゃないんだよね。例えばさ、夜寝る前に歯磨きするでしょ。それとおなじ感覚。歯磨きをするかのようにトレーニングしてた」(競技者E)
筋肉への「栄養」と化す食事	「タンパク質を体重の二倍、150~160gくらい摂って、炭水化物は一回100gをトレーニング前後に摂って、あとは朝にちょっと摂るみたいな感じでした。脂質は気にしてないっていうか、摂らないっていう方向性で。減量した時はちゃんと鶏肉を食べてました」(競技者D)
食事のルーティン化	「食事の回数の理想は、しっかりとれるときは一日6食くらい。3時間から3時間半くらいに一回食事を摂ります」(競技者K)
成長を阻害する活動の排除	「睡眠時間を6時間として一日18時間、このうちの1時間でもボディビルから離れたとしたときに、例えば、その1時間の間に酒を飲む、ピザを大量に食べるってことをしたときに、1時間くらい離れただけでも(成長に対する)マイナスが、ぶわーってでるんだよね。それなんだよね多分。24時間やるってことは大前提として求められてるから」(競技者C)
優先されるボディビル競技	「(今日も)絶対ジム行くんだって。会社の会食とかも『いや、僕は大丈夫なんで』みたいな。会食行こうって言われても『いや、僕はお弁当るんで』みたいな感じで」(競技者E)

以上の9つの概念(表5)から、筋肉を発達させる「大前提」として、ウェイトトレーニングを行うのみならず、食生活等の私生活を競技仕様に変化させる必要があることが示唆された。それゆえに競技者は、競技を私生活の中心に置きつつ、24時間すべてを競技実践化させると同時に、飲酒やジャンクフード、自身の確立したルーティンを崩す要因となる人付き合いといった成長を阻害する可能性のある活動を生活の中から積極的に排除する様相が看取され、【ボディビル競技へと収斂する私生活】というカテゴリーが抽出された。

## 5. 【「抛りどころ」となるボディビル競技】

表6 カテゴリー5に含まれる概念と発言例

概念名	発言例
ボディビル競技一色に染まる競技者	「僕の場合、トレーニングってのを取っ払っちゃうと特に何も残らないんですよ」(競技者A)
「ジム」という生き甲斐	「僕にとってほんとに、大きく言い過ぎかもしれないですけど、ジムが人生みたいな感じですよ。だからもう生き甲斐ですよ」(競技者F)
ボディビル競技に限定される社会的承認の獲得手段	「俺はたまたまボディビルしか取り柄がないから、特に特段ほかで何か秀でているってわけでもないし」(競技者E)
「抛りどころ」としての肉体	「(ボディビル競技が)アイデンティティってことですよ。野球選手としては結果でないからせめて、体大きくしてそっちで自分の個性じゃないけど、自分の存在意義みたいなのを」(競技者D)
アイデンティティの中核となる競技	「ボディビルありきのおれっていう確立したアイデンティティみたいなものがある」(競技者E)

以上の5つの概念(表6)から、私生活を競技へと収斂させる競技者にとってボディビル競技はアイデンティティの支えや社会的承認の獲得手段、生き甲斐という意味において「抛りどころ」となっていることが示唆され、【「抛りどころ」となるボディビル競技】というカテゴリーが抽出された。

## 6. 【「一輪車化」するボディビル競技者】

表7 カテゴリー6に含まれる概念と発言例

概念名	発言例
成長の鈍化によってもたらされる不安	「かなり不安だったわけですよ、自分がちゃんと成長して結果出せるのかっていう」(競技者A)
耐えられざる成長の停滞	「去年の自分より体が劣ってたらもう最悪な一年なわけじゃないですか。(人生を)競技に捧げてますとか言ってるくせに『去年よりひどくない?』みたいな感じで言われたら、人生終わりなんで」(競技者F)
成長によってもたらされる安心	「(体が成長しているときは)自信はつきますし、目標が常にあるっていう状態、それも少しずつその目標に近づいていってるってことになるので、少なからず。そういう意味でも高揚感っていうのはやっぱりありますし、だからすごく心に余裕ができるんですよ、それだけで」(競技者H)
成長機会を失うことに対する恐怖	「このルーティンを崩したら成長機会を失っちゃうって思ってる、だから、恐怖とか義務感でやってた感じですね」(競技者D)

以上の4つの概念(表7)から、ボディビル競技を「抛りどころ」とする競技者は、動的であることが唯一の安定の方法である「一輪車」のように、「成長」を遂げることができている状態では心的に「安定」することができる一方で、「成長」のスピードが緩んだり、止まってしまうと心的に「不安定」になってしまうことが示唆された。また、「成長」が止まることに対する「不安」や「恐怖」が競技者の「成長」に対する追求を脅迫的に強化していることが明らかになり、【「一輪車化」するボディビル競技者】というカテゴリーが抽出された。

## 7. 【拡大せざるを得ない肉体への「投資」】

表8 カテゴリー7に含まれる概念と発言例

概念名	発言例
「利回り」の減衰	「1増えるのに1払えばよかったのが、1増えるのに10とか100とか払わないといけないような状態になってくる」(競技者A)
「記録の更新」として経験される競技実践の成果	「筋肉ってそうそう変わらないよね。じゃあ、なんに対して自分がよくなってるかってみると、数字だよ、やっぱり。重量だったり回数が、おれらのやってるトレーニングではほとんどを占めてるわけでしょ。何キロ上がった、何回上がったっていうのが、この二つがほぼほぼ重要になってくるわけでしょ」(競技者J)
終わらなき向上	「トレーニング的に言うと前回の胸の日にやったトレーニングより1回でも多くこなしたいし、1キロでも多く上げたいし。そうしてくからやっぱり人間って成長していくと思って。やっぱりみんな維持しようと思っちゃうじゃないですか、減量中とか。ただ、維持しようと思うと絶対、人間退化しかならないんで、そこはもうどんどん底上げていこうと思って。だからライバルはやっぱり昨日の自分なのかなって」(競技者F)

以上の3つの概念(表8)から、競技者は挙上重量や挙上回数といった「数字」を基準に、「昨日の自分」と勝負するかのように「成長」を追求していること、また、そうであるがために競技者の「成長」への追求は「終点」となるゴールが存在しないことが示唆された。これに加え、競技者が成長を維持するためには漸次的に肉体に対する「投資」を拡大せざるを得ない状況に置かれていること

が明らかになり、「拡大せざるを得ない肉体への『投資』」というカテゴリーが抽出された。

また、競技者Jの語りから、ボディビル競技における競技実践の成果は「前回よりも一回多くベンチプレスを挙げられた」というように、「記録の更新」として経験されることが示唆された。このことから、競技者が行った競技実践の成果は、一時的に留保されたのち、その後の競技実践にもたらされる結果として現れるということが推察され、本稿ではこの特性を「意味の事後決定性」と定義した。そして、この特性ゆえに競技者は、過去の競技実践の成果を証明するために現在の競技実践において「記録」を更新しなくてはならず、また、現在の競技実践の成果を証明するために未来の競技実践において更なる「記録」の更新をしなければならない状況、すなわち、絶えず競技実践を生起させ、無限に「記録」を更新しなければならない状況に置かれていることが示唆された。

## V. 分析結果のまとめ

本稿では、「肉体と競技者」「競技者と競技空間」「競技空間と生活空間」という三つの位相に着目し、ボディビル競技者が競技へのめり込んでいく要因とその過程について検討を行った。

その結果、35の概念と7つのカテゴリーが抽出され、図2に示す結果図が得られた。主な結果としては、第一に、競技者は「筋肉は努力を裏切らない」という経験を経て、それまで「手段」であったウェイトトレーニングを目的化させ、競技空間に身を置くことや他の競技者とのかかわりからボディビル競技に特有の技能やものの見方を学習し、それらを通してボディビル競技者化することが示唆された。また第二に、ボディビル競技者化した競技者は、絶えず自身の肉体を内省する中で自身の肉体に満足することができなくなり、筋肉の発達を求めて私生活を競技へと収斂させつつ、ボディビル競技を「拠りどころ」としていく様相が看取された。ここにおいて、私生活を競技へと収斂させ、ボディビル競技を「拠りどころ」とする競技者は、常に「成長」し続けなくては心的な「安定」を保つことができない、いわば「一輪車化」した存在となると同時に、肉体に対する「投資」を拡大させ続けなければ「成長」を維持することができない状況に置かれていることが示唆された。また、そうであるがために私生活の競技への収斂は先鋭化され、のめり込みが自己増強的に強化されていく様相が看取された。さらに、ボディビル競技の競技実践がもつ「意味の事後決定性」という特性からは、競技者は過去の実践の意味証明と未来における成果を獲得すべく、「記録」の更新を目指して現在の競技実践に没入せざるを得ない状況に置かれていることが推察された。

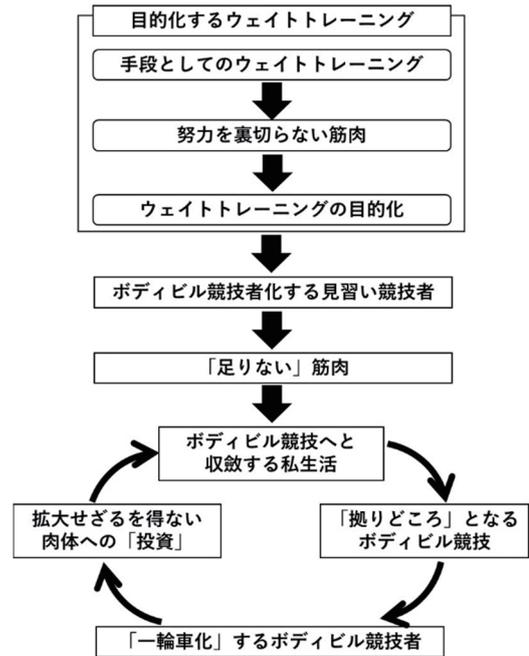


図2 結果図

## 主な引用・参考文献

- ・船津衛 (2000) ジョージ・H・ミード—社会的自我論の展開—。東信堂。
- ・石岡丈昇 (2012) ローカルボクサーと貧困世界—マニラのボクシングジムに見る身体文化。世界思想社。
- ・木下康仁 (2007) ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて。弘文堂。
- ・ロイック・ヴァカン：田中ほか訳 (2013) ボディ&ソウル—ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー—。新曜社。
- ・ミード, G. H., : 河村望訳 (1975) 精神・自我・社会。人間の科学社。
- ・ミード, G. H., : 河村望訳 (2001) デューイ=ミード著作集 [14] 現在の哲学・過去の本性。人間の科学新社。
- ・竹崎一真 (2015) 男性高齢者の老いゆく身体と身体実践—東京都Sジムにおけるボディビルダーたちの事例から—。スポーツ社会学研究, 23(1): 47-61.
- ・竹崎一真 (2019) 戦後日本における男性身体観の形成と揺らぎ：男性美（ボディビル）文化の形成過程に着目して。体育学研究, 64(2): 687-704.

# 〈体育会系〉就職最盛期に関する仮説生成的研究

1990年代の大学新卒採用と企業スポーツの文脈に着目して

東原 文郎（京都先端科学大学）

**【背景】** 〈体育会系〉が他に比して有利を得るという〈体育会系〉神話は昭和初期に成立し、また社会文脈とともに変容しながらも今も残存することが報告されている（東原，2011；2013；2017；2018；2020；2021；東原ら，2015；2017；2019）。だが、体育会系就職最盛期とされる90年代の大学新卒労働市場において、体育会系神話は実際にどのような形で現れていたのか、具体的には示されてこなかった。

**【目的と方法】** そこで本報告では、バブル絶頂期～金融危機に活躍した元R社員フットボーラー3名（体育会系就職 / 採用当事者，表1）の語りに耳を傾け、当時の実態と、その文脈を形成する企業スポーツと大学新卒就職市場のダイナミズムの一端を仮説生成的に記述する。R社は60年代より情報企業として大学新卒就職市場のマッチングビジネスを牽引し続けており、かつ90年代に企業スポーツの栄枯盛衰を経験した国内唯一の企業である。

表1: インタビュー調査協力者の概要

仮名	性別	年代	大学グループ	学部	現職	ヒアリング	初職
マタノさん	男性	50代前半	関東伝統私学	文系	会社役員	2019/11/25	広告大手R（1991）
アキモトさん	男性	50代前半	関西公立大上位	文系	会社役員	2019/12/04	広告大手R（1991）
タケジョウさん	男性	50代前半	関西伝統私学	文系	個人事業主	2020/09/30 (Online)	広告大手R（1991）

**【結果と考察】** R社アメフト部では、仕事と競技の両方で日本一を追求するという目標の下、アメフト選手枠が設けられ、採用戦略の一環に位置づけられていた。そこでは、「働き手としての能力」を度外視した形で競技力によってのみ採用選考が行われるのではなく、あくまでR社の採用基準（成長可能性＝地頭×根っこ（内発性＋考動力）＋素直さ）を満たすことが前提とされた。

マナノ「自分の入社時は明らかに採用と関連していました。人事の仕事は、アメフトで優秀な選手を集めると同時に、会社から言われているAランクの人材を例えば300人集めるというのが、ミッションになっていたわけです。「そのうちの20人はアメフトで良いよ」というような会社との握りの中で、会社の新卒採用とアメフトのチーム強化を両立させるわけです。ですから彼のモチベーションは高く「日本一のアメフトチームつくるぞ!」というような思いが、一般の学生にも伝わってくるので魅力的なんです。」

アキモト「アメフトはまだ新興のスポーツなので、レベルもそこそこ。なので、「仕事やりながらも日本一なれるやろ?」っていう、「[仕事とアメフト] 両方日本一や!」みたいな、そんな感じでやってたんですよ。でも結果的に、毎週出る営業マンランキングのトップになってるアメフトの選手って、結構多いんです……。[面接で学生を評価する際は] 基本的に「自分で考えて自分で動ける」っていうことはすごく大事にしていました。その学生のその“根っこ”にあるもんは何なんやって。“根っこ”って言葉ってやたら使うんですよ、Rでは。“根っこ”に持っている、表面に表れてくるところじゃなくて、“根っこ”にあるのは何か、「これがあってそう動いてんだ!」みたいなものを、掘って掘って掘りまくる。その中で「ここがちゃんと自分の中にあるエネルギーだ!」という、要は外的な要素で出る力やなくて、内から湧いてくるエネルギーとして、「中から湧いてくるエネルギーどだけ持ってる?」っていう。[R社では社員はみな] この腹の中というか「“根っこ”のエネルギー」っちゃうのを一番大事に、それをもうベースとして自律的に動こうとしてるので。あとは“素直さ”とか、“吸収していく力”... 学生のところで完成してるわけじゃ決してないので、社会人になってやっぱりいろんなこと行動しながら吸収していける、その素直さ。あと、いうても“地頭”がある程度ないと組み立たへんから、成長がどうしても

遅くなるので... そんな感じですかね. で、それがそろってくると「〇(マル)！」いうて、よく付けてました」

では具体的に、どのような手続きで社内報に掲載されるような多くの優秀な営業マンを獲得したのか.

タケジョウ「総務部の中にあつた [アメフト] チームの運営事務局の一員として、メインのミッションとしてチームのリクルーティングを担っていました. 今、Jリーグのチェアマンやってる M 井 M さんっていう方が当時 R の人事部長で、僕はその M 井さんのところに足しげく通つて「こんな学生いるんで面接してやってください」ってお願いしていました. 基本 R 社は、フットボールやってるから採るっていうスタンスがない会社だったので、平気で日本代表クラスの採用候補者を面接で落としたりしてたんです. とはいえ、こっちからもあの手この手で熱意を見せることで、ちょっと片目薄目つぶってもらう、ぐらいの“下駄の履かせ方”してもらったことはありました..... いわゆる R が欲しいような人材の発生率が高そうな、いわゆる高偏差値大学<sup>(注1)</sup>に対しては、アメフト部の学生集めて“食事会”をやりました. [対象学生の] 人数が多ければ何人か R の社員でアメフトやってる同僚に参加・協力してもらつて、彼らの部活動に関する相談にのつたり、いろいろと就活に関しても彼らが気になってることに相談にのつたりしました. その時点ではそんなに積極的に誘うって雰囲気を出しすぎずに... で、終わったあとにですね、ちょっとミーティングして、会社としても「一緒に働きたい！」と思えるようなタイプの学生をリストアップしていく. その選手が特にフットボール選手としても優秀であれば、声掛けに行くところの優先順位は上がって行く. 生々しいですが、エクセルでリスト作つて、会社⇌ビジネス視点での“ぜひ一緒に働きたい度合い”みたいなものと、アメフトのプレイヤーとしての魅力の両方をランクづけて、優先順位つけたら、その後は個別に誘っていく. そして、いわゆるエントリー、採用選考に進んでもらえるようにいろいろ動いていく..... で、ちょっとマイナーな子で面白そうな選手を見つけたりすると、“一本釣り”. 会社としては、そんなに積極的にほしいタイプじゃないだろうなっていう大学の、優秀な選手なんかは、“一本釣り”、個別に連絡を取ります.]

タケジョウ「口説く時は必ずトップ営業マンの写真とか載ってる社内報を持っていきます. アメフト部の選手がたまに載るんですよ、アキモトとかも出るわけです. そうすると「俺らはアメフトやるために会社入るんじゃないよ」って言って、「仕事もアメフトも結果出すんや、見てみい、この社内報」言うて、「アキモトというのはな、リーディングレシーバーやけどトップ営業マンなんや. こういうの、めっちゃかっこええやろ？」とかつて啓蒙活動をする. 本当にもう、内定が出るまで一切アメフト部は出て行かないってこともありました. 実際に [入社してくれても] 入部を断られるケースもありました. 会社としては別にフットボールやつてようがやつてなからうが、採りたい人材を採ってるので、その [フットボールをやる] 意思がなければ、仕方ないですね..... エントリーマネジメントのところでも少なくとも“心意気”の部分においては、「仕事もトップを目指すチームだ」ということをすごく熱く語っているの. フットボールをプロに近い状態でできるチームは他にもあつたし、そこに全く響かない人は入って来ないんですよ. そこはその [仕事と競技を両立する] 生き方のかっこよさを説きまくつて、本当に響かなかつたら追っかけるべきじゃないな、という感覚がありました」

R ではリクルーティング以外にも、トレーニング時間を増やすことを通じてアメフトチームの強化を図り、社長が交代しスポーツへの予算配分が減らされる中でも複数回にわたつて日本選手権を制した. そこには、社業と両立を損なわないよう、以下のようなロジックや取り組みもあつた.

タケジョウ「僕が入社した 91 年は、練習が土日と水曜日の午前中、昼から出社だったんですけど、最終的に、初めて日本一になった 6 年目、96 年の秋のシーズンは土日プラス試合の 3 日前から [仕事を休めること] になった. 例えば日曜日が試合だったら、土曜日は元々休みですけど木、金は会社を休んでも良い、となつてました. 当時は平日の試合がたまにあつたので、水曜日の晩に試合があるともう、月、火と会社行かなくてもいい. でも、付け加えておくと、それは通常の有給とは別枠の特別休暇って扱いになって、給与面、休暇面の部分においては補償されるんですけど、そのことによって業績には何も考慮がされない. なので、別に日本一になつても社員としての評価

は上がらない、逆に査定の数値が下がるメンバーもいました。でもその中でめちゃくちゃ工夫して結果出してるメンバーは、休み多い少ない関係なく評価してもらってたと思います。結局、彼らのヒューマンスキルっていうか... 例えばよく言っていたのは、日曜日試合があったり、もしくは月曜日の晩に東京ドームで試合があったりする時、[チーム内で]「絶対次の日朝一番に会社に行こう！」ということ。朝早く来てやるやつは絶対尊敬されるじゃないですか(笑) 「えっ、昨日試合してたのに今日こんな朝早くから来てるの？」って。で、そういうふうにして味方増やしていったら、自分じゃなくてもできる仕事を代わりにしてもらえ、とかね。社内の身近な同僚に協力者増やしていくことによって、自分たちがフットボールしやすい環境を作っていくことを、上手な選手もやってたなって思います。」

マタノ「「仕事で限られた時間の中で営業成績を上げて成果を出す」のと、「アメフトで決められた試合時間の中で結果を出す」のは、感覚的には似ているんです。営業だと常にマーケットの環境や、お客さんのニーズなどを確認し、それを上回るプランを提供する。アメフトも相手のチームや、目の前にいるプレーヤーの情報を収集し、勝つためのプランを考え実行する。そのためにミーティングやトレーニングで事前準備をする。それを理解して行動している人は強いと思います。」

R社はこのようにして「仕事も競技もトップを！」という価値を実現した。では、なぜそれが可能になったのか。それは、当時のR社とアメフトという競技が置かれた社会文脈に依存していると考えられた。すなわち、当時のR社が最優良企業として認知されていなかったこと、および、当時のアメフトがいわゆる高偏差値大学で多く実施されたマイナースポーツであったことが、当該価値実現の前提条件となったものと仮説される。2点強調して指摘する。

第一は、アメフトが企業スポーツのブルーオーシャンであったことだ。R社は80年代末期に世紀の贈収賄スキャンダルの当事者となり、あらゆる面で企業イメージの回復を図らなければならなかった。R社がスポーツを通じて企業イメージの向上を図ろうとしていたことは、89年の野球部創設の際の報道<sup>(注2)</sup>からも見て取ることができる。

企業イメージの向上と社員の交流促進によるモラルの向上は、80年代から90年代末期にかけての日本企業が社内スポーツクラブを持つ理由として、ごく一般的な理由である。だがそれだけに、野球やサッカー、ラグビー、バスケットボールといったメジャースポーツには多くの企業が参入した。確かに、アメフトでも銀行などが大量に参入したが、伝統的で人気のあるスポーツの比ではなかった。そのようなメジャースポーツで日本一を実現するには、人的にも資金的にも極めて多くのコストを投じる必要がある。試合で結果を出すために、アスリート社員はスポーツにより特化した勤務形態になっていくが、そうすると一般社員との距離が乖離し、同じように働く同僚を応援することによって果たすべき社員の交流促進機能、モラル向上機能が十全に果たされなくなる、というジレンマも生じてしまう。つまり、メジャースポーツはレッドオーシャン、マイナースポーツはブルーオーシャンなのだ。「程好くマイナースポーツ」であったアメフトは、メジャースポーツと比較して早い時期に、低いコストで目的を達成できるフィールドとして適していたといえる。

また、アメフトが高威信大学で多く実施されたマイナースポーツであったことは、R社の採用基準を満たす人材の出現率を高めたと考えられる。

タケジョウ「仕事もちゃんとやってくれそうで、いわゆる“地頭”，Rでよく言う“地頭”が良くて、行動力があるタイプの人、彼[アキモトさん]のような人材はすごく好まれるんです。結局そういう選手は、競合となる会社が、アメフトの強豪チームじゃなくて、いわゆる商社だったり、当時だったら金融だったり、という、フットボール全然関係ないところで取り合いになるんです。..... Rが期待していたのも、どちらかという所高校からアメフト推薦で入ってフルタイムのプロコーチがいて、っていうチームの学生よりも、未経験で大学に勉強して入って、新しいスポーツに出会って、勧誘も自分たちでめちゃくちゃ頑張ってるって、チームづくり、チームの練習プラン作ったり、それこそ素人のフットボールを知らない学生にフットボールを教えたり、面白さを伝えたり、みたいなことしながら戦力に育てていって... っていうことは、本当に「世の中のいろんな企業がやってること

と一緒にすよね！」

この仮説は、近年のラクロスが男女ともに優良企業からの内定獲得率を高めているという現象(東原, 2017) の理解にも通じる。現在のラクロスも高校段階で強化している部が少なく、スポーツ推薦や指導体制が十分に整備されている大学はまだまだ少ない。部員はまずしっかりと受験勉強して大学に入学し、そこで出会う新しいスポーツのチーム強化とマネジメントに自ら取り組まざるを得なくなっている。現在のラクロスとの比較からも、働き手として優秀な体育会系人材を育てるのは、特定のチームスポーツの見た目やルールの類似性にあるというよりは、学生アスリート自らが自律的に組織の強化やマネジメントに関わる経験を積める社会文脈にあるか否か、その類似性にあると言えそうだ。

そして、R 社がそのような働き手としても優秀な多くの〈体育会系〉人材を吸収できた理由は、当時の社会文脈においてR 社が「異端」(マナノさん) であったという事実と関係するだろう。当時のR 社は、財閥系の金融や商社と比較すると、黙っていても最優秀の人材が集まってきて採用できる企業ではなかった。社会人となっても「フットボールをプロに近い状態でできるチームは他にもあった」(タケジョウさん) 中で、本気で仕事とフットボールの二兎を追えるという魅力が、優秀な〈体育会系〉人材を惹きつける強力なフックになったのかもしれない。

**【まとめ】** R 社は、大学新卒就職市場で「異端」であり、アメフトは「程好くマイナースポーツ」であったことで、多くの優秀な〈体育会系〉人材が集まる稀有な企業となった<sup>(注3)</sup>。しかし90年代末から2000年代初期にかけて、社会全体の景気と業績の低迷に伴ってスポーツチームは外部化され、アスリートとしての活躍を期待されるような新卒採用枠もなくなっていった。R 社の体育会系就職 / 採用はこの通り、企業と企業スポーツの栄枯盛衰によって多分に影響を受ける、極めて文脈依存的な現象であったと仮説される。この仮説は今後、企業(実業団)スポーツとして新興/マイナースポーツであるラクロスやハンドボール、伝統のあるラグビー、プロリーグがあるサッカーや野球などとの比較によって検証されることが期待される。

---

(注1) 具体的には大学グループでいうといわゆるWKJグループからGMARCHグループくらいまで。

(注2) 毎日新聞(1989)「リクルート社に野球部」。毎日新聞:p. 26。(1989年11月16日付)

(注3) その時採られた社員の多くは既にR社を去っているが、女性も含めて元R起業家や経営者として社会にその名を轟かせる人も少なくなく、またR社自体も日本を代表する優良企業に成長した。ウェブサイト「キャリアハイ転職」(2020)起業家輩出企業リクルート出身の女性起業家12人。

(<https://www.recme.jp/careerhigh/entry/businesswomen>). ; 笹本裕, 竹村俊助(2020)「元リクルートのビジネスマンはなぜこんなに強いのか?」…30代前半でも退職金1000万円!? ツイッター社長に30の質問 #14. 文春オンライン, (<https://bunshun.jp/articles/-/40099>) 2020/01/31 参照。

## 【編集後記】

この度、体育社会学専門領域編集委員会では、日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会（筑波大学）に向けて、体育社会学専門領域発表抄録集をとりまとめ、ホームページに公開いたしました。お忙しい中、ご投稿をいただきました先生方に対し、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

さて、本抄録集は昨年度より製本版ではなくなり、名称も「発表論文集」から「発表抄録集」へと変更となりました。また、今年度より学会大会における発表も「体育社会学専門領域」としては最終日のみとなり、本抄録集に掲載された抄録数も昨年度より大きく減少しました。しかしながら、抄録の内容を拝見しますと、これまでと同様に意欲的で興味深い研究ばかりであり、学会大会での発表が待たれるところです。現在、編集委員会では、本専門領域の機関誌である「年報 体育社会学」第3号の発刊に向けて、鋭意編集作業を進めているところですが、編集長として、今回の発表の中から機関誌に投稿される論文が多数出ることをご大いに期待しております。

最後になりますが、ご多忙中にもかかわらず本抄録集のとりまとめと編集作業にご尽力いただきました事務局の石澤伸弘先生、多くのご助言を賜りました前編集委員長の水上博司先生に対しまして、衷心よりお礼申し上げます。

体育社会学専門領域 編集委員会  
委員長 山本 理人

日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会 <主管校：筑波大学>

**体育社会学専門領域 発表抄録集 第2号**

2021年8月23日 発行

発行者 山口 泰雄 （体育社会学専門領域 代表）

発行所 日本体育・スポーツ・健康学会 体育社会学専門領域

事務局 〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里五条三丁目1-5

北海道教育大学 札幌校 石澤 伸弘 研究室内